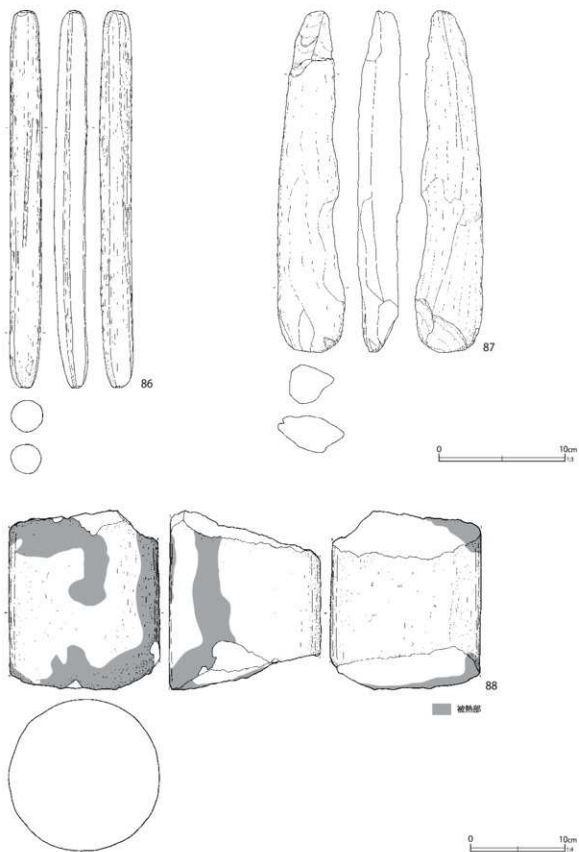
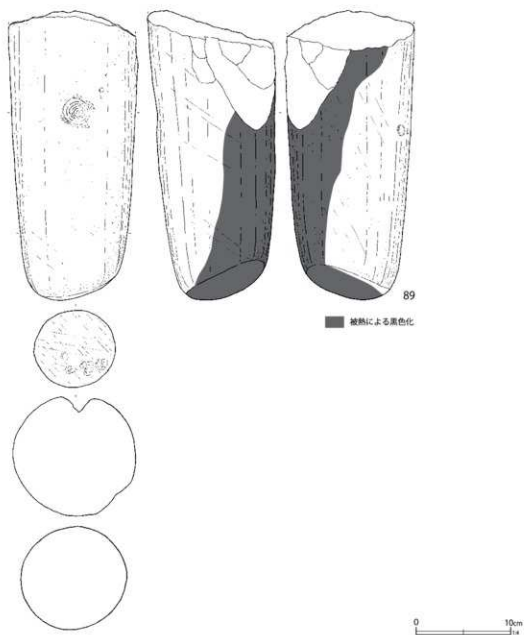




第 142 図 縄文時代の石器 (13)



第143図 縄文時代の石器 (14)

が帯状に磨られている。27、31は欠損品であるが、欠損部に剥離等の調整を施して再利用した、磨石からの転用品である。

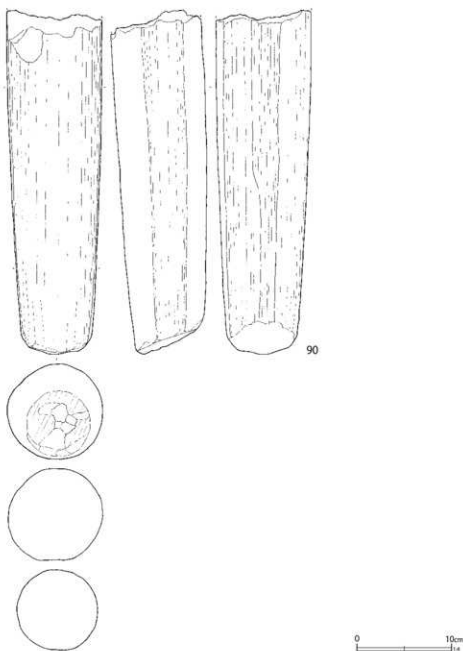
砥石 (第133図40、41)

2点出土した、40は結晶片岩の扁平な礫を使用して、表裏面の中央部に研ぎ面が作られている。磨製石斧などの研磨用に用いられたものと思われる。

磨石 (第134図42～135図59)

全体で18点出土した。円礫もしくは楕円形の礫が使用され、磨面が光沢を放っているものもあれば、割れているものも多く存在する。

42～47はほぼ完形品で、42～44は使用によるものか形を整えるためのものか判断が難しいが、両面及び側面が磨かれており、42は磨面が光沢を持ち、43、44は中央部に凹石状の敲き面が認められる。48～59は欠損しているもので、52は欠損部分にも擦痕が認められる。



第 144 図 縄文時代の石器 (15)

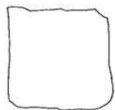
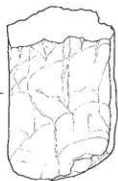
石皿 (第136図60～140図82)

全体で23点出土した。ほとんどが欠損品である。安山岩製の石皿は凹面が強く、形も整えられるなどの加工が施されているものが多い。一方で、扁平な閃緑岩や砂岩製の石皿は、凹面が目立たず比較的平らな磨面を持つものが多い。61、62、64、68、77などは直線的な側面を持つ形状に作られている。60、63、65は楕円形状の丸みを持つ形

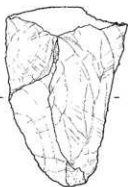
に作られている。安山岩製の60、62、65、67、68、72、緑泥片岩製の82には、凹穴が穿たれている。

台石 (第141図83～85)

台石と思われる石器が2点出土した。石の少ない大宮台地にあつて、大きな礫が出土することはいくらかの目的を以て遺跡内に持ち込まれたものと思われることから、何らかの作業を行う台石として認識した。83、84は平坦面を持ち、85は凹穴



91



92



第 145 図 縄文時代の石器 (16)

が見られる。

石棒（第142図86～144図90）

86は細長い丸棒状の石棒で、全面が良く研磨された優品である。頭部の作り出し等が行われていない。87は細長い石棒の未製品と思われ、剥離等で成形されている途中である。

88～90は大形の石棒で、欠損品であるが、88は径が16cm程ある大形で、胴部が輪切り状に残っているものである。敲打で成形し、丁寧に研磨されたものであるが欠損しており、欠損後比熱されて部分的に黒色化している。

89は石棒の基部と思われる、下から30cm程のところで折れている。断面は径13.7cmのほぼ正円で、下端が傾斜するがやはり丁寧に磨かれている。下

端から約20cmのところに、凹穴が1カ所開けられている。比熱されており、一部表面が黒色化している。

90は径10cm程のやや細めの石棒で、長さ約36cmで折れており、基部に相当するものと思われる。下端は斜位に傾くが、磨きが施されている。

88、89は石皿70と共に出土しており、土器群などの他の遺物と合わせて、祭祀跡を形成していたものと推定された遺物である。

石核（第145図91、92）

比較的大きなチャートの石核が2点出土した。

91は角柱状の礫で、赤色のチャートである。大きく分割されたままの礫である。92は濃灰色のチャートであり、礫表はほとんど剥ぎ取られている。

4. 石製品

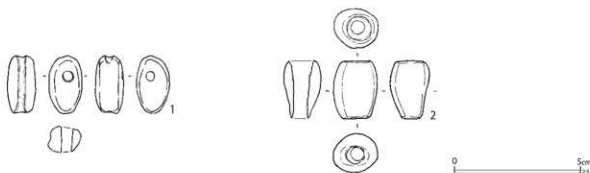
（1）垂飾（第146図1）

1は翡翠の垂飾である。1点のみ出土した。H3区から出土したもので、H3区は第VI群土器が主体を占めることから、この翡翠製の垂飾も同時期の所産と推定される。

1は縦2.3cm、横1.4cm、厚さ1.2cm、重さ6.7gの小形のものである。楕円形を呈しており、上部部に径2mm程の円孔があき、正面から見て左側の側面に、上下端まで覆う浅い溝が彫られている。

（2）管玉（第146図2）

2は黄緑色の滑石製の管玉である。1点のみ出土した。B1区から出土したもので、縦2.3cm、横1.8cm、厚さ1.6cmを測る。形状はやや扁平で、上端部が1.0cm、下端部が0.7cmで、上端部から下に向けて上幅0.9cm、下幅0.6cmのロート状の穴が穿孔されている。時期は不詳であるが、垂飾と同じ縄文時代後期の堀之内2式から加曽利B式期の所産と思われる。



第146図 石製品実測図

5. 木製品

調査区全域から、多量の木製品が出土した。特に、自然木集中区とした3地点（第8図）を中心として、自然木とともに各種の木製品が、土器などと共に出土した。木製品については個別に説明を加えるが、最も多い容器や道具類についてはグリッド別にまとめて報告する。

（1）装身具類

耳栓（第147、148図1～6）

全体でほぼ完形品の6点が出土した。耳栓の分布（第147図）をみると、B～C-1～2区にかけて5点が、D1区から1点が出土している。B～C-1～2区にかけては加曽利B式土器が主体となって出土していることから、耳栓のおおよその時期も推定されるところである。

いずれも鼓形を呈しており、丁寧に凹面状の深いケズリ込みが施されている。側面は挟りの浅いもの（1、2、6）から、やや深いもの（3～5）まであり、鮮明な赤色を呈していた。大きさは、平均約2.5cmで、1が2.1cmと最も小さく、5が2.7cmと最も大きい。

5、6については漆の塗膜分析を行った（第VI章第2項参照）。5は表面から2層の塗料層、その下に下地層が観察され、塗料層の1層目と2層目に水銀と鉄の鉱物が含まれているのが確認された。赤色塗料層には赤色顔料として水銀朱が使用されていたものと思われるが、鉄も検出されたためベンガラが使用されていた可能性も考えられる。

6は塗料層2層と下地部分と、さらに塗料層3層と下地部分の2通りの構造が確認された。2層構造の部分では2層目に鉱物が含まれており、3層構造の部分では粒径はそれぞれ異なるが3層全部に鉱物が含まれていることが確認された。このことは、1つの耳栓であっても、塗り分けもしくは塗り直しが行われていた可能性を物語っている。どちらの耳栓も、元素分析の結果、顔料として水銀が多く検出され、赤色顔料として水銀朱が使用

されていたことが明らかになった。

櫛（第147、148図7、8）

2点出土した。7はD1区、8はI3区から出土した。いずれも結歯式の漆櫛で、頭部の一部が残存していた。両者とも3cm程の大きさで、X線CT撮影画像解析（第VI章第1項参照）と漆の塗膜分析（第VI章第2項参照）を行った。

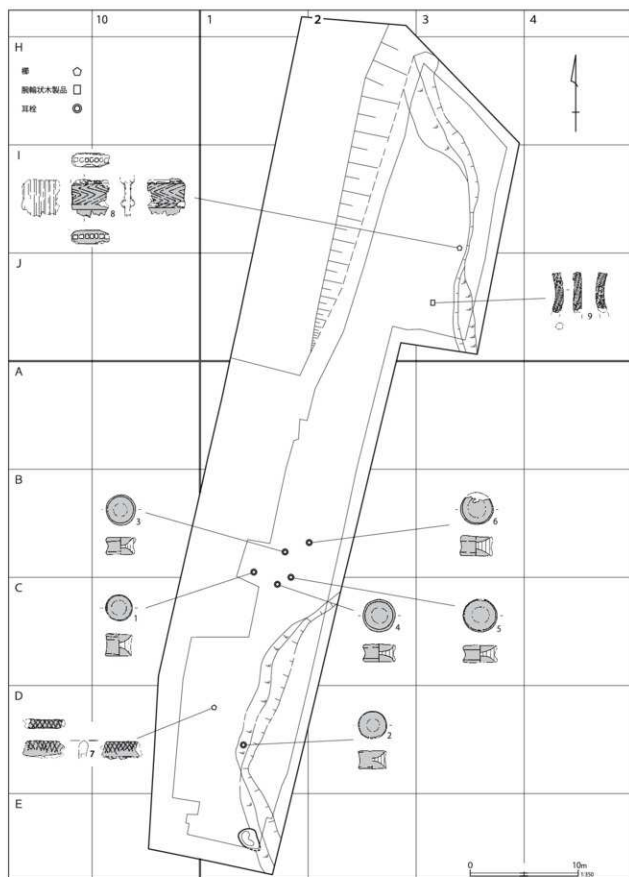
CT画像解析では、漆で塗られた頭部の結歯構造が鮮明に可視化された。2点の内7は漆の赤彩顔料にベンガラが使用されていたため画像の三次元化ができ内部構造を把握しやすかったが、8は水銀朱が使用されていたため三次元化が難しかった。

7は、芯材は腐食しているが、画像解析の結果、断面長方形の細長い櫛歯を縦に並べて、直交する同様な形の横架材4本で櫛歯の表裏を挟み込み、紐で巻き付けるように固定し、塑形材で固めて頭部を作り出している。さらに、その上から櫛のかかった紐を格子目に巻き付け、その上を塑形材で固めている。

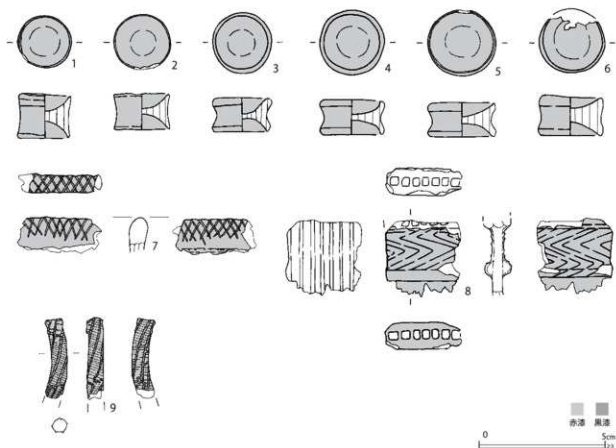
漆については、7は表面から赤色+暗赤色+黄色の塗料層3層が確認された。すべての層から鉄を含む鉱物が検出され、赤色顔料としてベンガラが使用されていることが明らかになった。

8は7と同様に櫛歯と横架材を紐で巻き付けて固定し、塑形材で固めて頭部を形成している。その後矢羽状の文様を付けるが、糸を巻き付けた痕跡がないことから、7とは別の方法で模様が付けられていることが分かった。

漆は表面から赤色+黄色+赤色+赤色+黄色の5層構造が確認され、表面の赤色+黄色層は製作後に塗り重ねられたことが明らかになった。赤色層からは水銀が、黄色層からは鉄分が検出されたことから赤の発色は水銀朱で、下地に鉄を含むベンガラのような鉱物が用いられていたことが明らかになった。



第147图 木製装身具分布图



第148図 木製装身具実測図

腕輪状木製品 (第147、148図9)

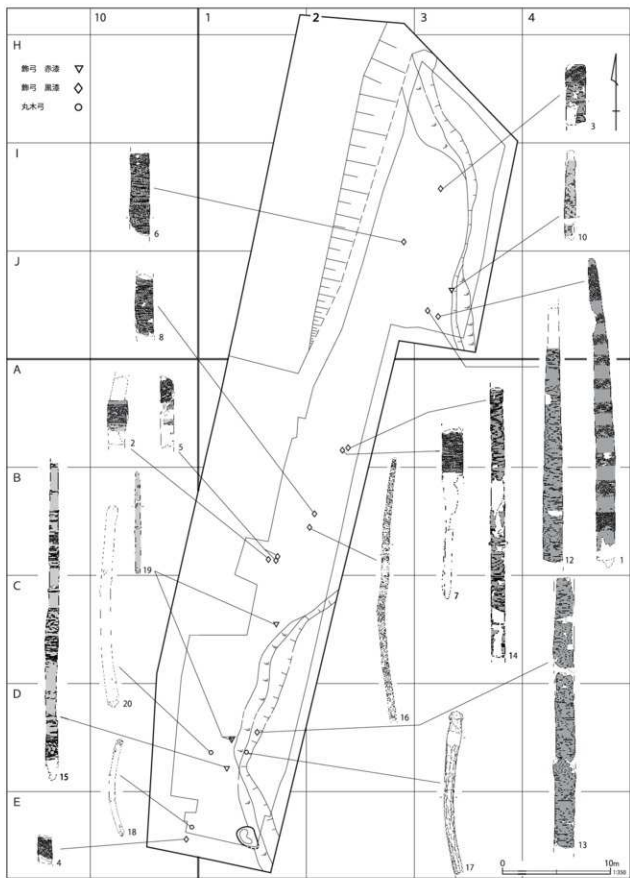
1点のみ、J 3区から出土した。9は角柱状の木材を芯にして、網状の撚り紐を巻き付けるもので、端部(実測図上部)が作られて緩く湾曲することから腕輪状の装飾品と判断した。長さ3.2cm、径0.6cmを測る。さらに同一個体の小破片がある。櫛と同様に、X線CT撮影画像解析(第VI章第1項参照)と漆の塗膜分析(第VI章第2項参照)を行った。製品の軸方向に緩く撚り合わせた紐(縦紐)5本が螺旋状に巻かれ、それと直交方向に緩く撚り合わせた紐(横紐)が縦紐と絡められて巻かれているが、その繋がりとは不明である。

漆に関しては、撚り紐の上に黒色粉末を混ぜた塗料層があり、その上に赤色塗料層3層が確認された。そして、赤色顔料層から鉄と水銀が検出され、下塗りにはベンガラを混ぜた塗料を塗り、仕上げに水銀朱の塗料が塗られたことが明らかになった。

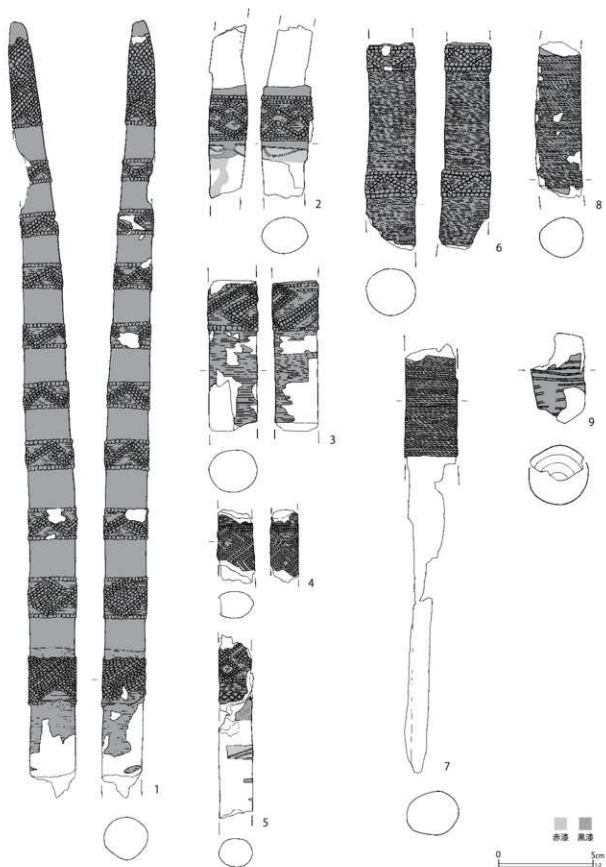
(2) 飾弓 (第149～152図)

調査区全体から、小破片も含わせて飾弓17点、丸木弓3点の合計20点が出土した。弓は第149図で示したように各グリッドで散在的に分布しているが、B 1・2区にやや集中して5点が出土している。弓の材質はほとんどがニシキギで、9のみクリが使用されている。木取りは芯持丸太で、10のみ芯なし削り出しである。2、6、16については漆塗膜の分析を行った。

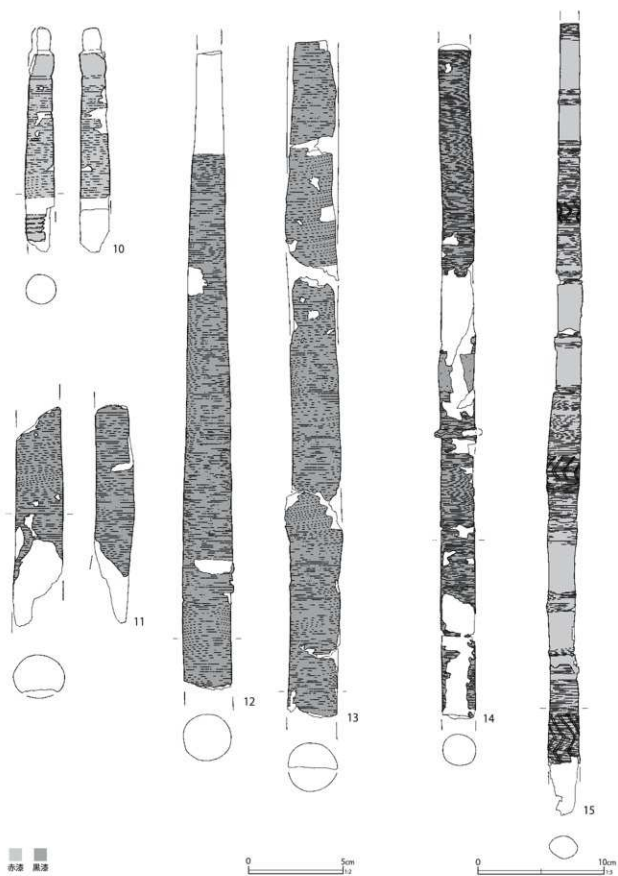
1はJ 3区の祭祀跡付近から出土しており、全長40.8cmで、先端部を欠損するが、ソケット状の弮が取り付けられる可能性がある。破片下端部付近は地に細い糸状の紐が密に巻かれており、握に近い部分と思われる。下巻きを施した部分から先端にかけておよそ等間隔に9段のリング状の装飾が施されており、各段は最下部で2.5cm、先端部で1.2cmと先端に向かって少しずつ幅を減じてい



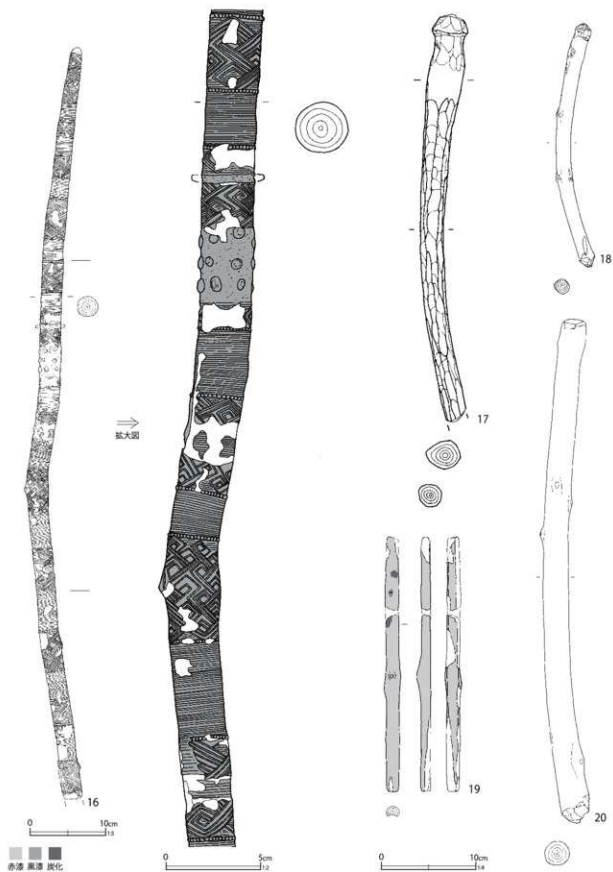
第149图 弓分布图



第150図 飾弓実測図(1)



第151図 飾弓実測図(2)



第152図 飾弓実測図(3)・丸木弓実測図

る。装飾は糸状の紐を下巻きに、上下端をやや太い糸紐で区画し、3～4本単位の束で鋸歯状もしくは規矩形組文が施文されている。下巻きと刺繍状のモチーフとの関係は不明であり、部分的に4本や3本になったりすることから、下巻きに編み込んでいる可能性もある。弭付近の先端部では、このリング状の装飾3段が合わさって、幅広の装飾帯となっている。

この区画や刺繍状モチーフに使用されるやや太い紐は、下地に巻く細い糸紐とは明らかに異なり、下巻き糸紐が1段撚りの縄のように観察できるのに対して、2段撚り状の縄と思われ、丸い節が連なる形状である。塗膜上からの観察であるため曖昧であるが、縄文原体の撚りとは異なる様相が観察される。部分的にみられる太い紐の形状からは、推測ではあるものの、チェーンステッチ状の紐が使用されていたことが想定される。この太い紐は、多くの飾弓の装飾で確認される。

2はB1区出土で、1と同様なリング状の装飾が施されるもので、刺繍状の紐は2本単位で鋸歯状文を重ねて菱形を構成している。漆は赤漆と黒漆が塗られている部分があり、赤漆の部分では黒漆、赤漆の両者が、黒漆部分では黒漆のみ塗られていた。黒漆部分では黒色粉末を混ぜた塗料層が確認されている。赤漆部分では水銀朱とベンガラの両方の使用が推察された。

3はI3区出土で、細紐による下巻きが全体に施され、1と同様な規矩形の模様が4本の太紐で刺繍されている。

4はE10区出土で、全体に下巻きが施され、太紐でやや幅広の渦巻文を重ねる菱形組文が施文されている。

5はB1区出土で、2と同様に赤漆と黒漆が塗られており、太紐で規矩形や菱形のモチーフが施文され、下段に鋸歯状文をずらして重ねる連続菱形組文が施文されている。

6はI2区出土で、全面に下巻きが施され、約

1.5cm幅のリング状装飾が施されている。モチーフは鋸歯状のみで、比較的単純な文様である。下巻きを施した後に塗料で接着し、その上に太紐で文様を施文し、さらにその上に4回塗装をしていることが確認された。また、塗料層には顔料は含まれていなかった。

7はA2区、8はB2区出土で、いずれも下巻き部分が現存しており、黒色を呈する。9もB2区出土で、下巻きの糸紐がほどけている。

10はJ3区出土で、先端に削り出しの弭が残っており、弭の下部では下巻きが幅広く行われ、赤漆が塗られている。そこから1cm間隔を空けて、また下巻きが行われている。

11はD1区、12はJ3区、13はD1区出土で、いずれも黒色を呈し、若干間隔のあく下巻きが全面に施されている。12は先端がほどなく弭になるものと思われ、長さ33.6cm、径2.5cm程を測る。13は長さ35.4cm、径2.4cmを測る。

14はA2区出土で、全面に下巻きが施される黒い弓で、中央部付近に鏝状の装飾が付き、鏝上には鋸歯状の模様が窺われる。その2cm程上に砂を混ぜたような漆が2cm程の幅で塗られている。この鏝状の装飾と漆帯付近が、握になるのであろうか。長さ53.7cm、径2.7cmを測る。

15はD1区出土で、赤漆が塗られた弓である。5cm程の幅で下巻きが施された3ヶ所を中心に、2cm程の間隔を空けて2個対のリング状下巻きが装飾として施されている。幅広の下巻き部分にはやや太い紐で縦のジグザグ模様が施され、さらにその上に細紐が下巻き状に巻かれている。長さ62.7cm、径2.6cmを測る。

16はB2区出土で、長さ99.5cm、径2.8cmを測る。半分以上が現存しているものと思われるが、節のある材をそのまま調整加工せずに使用し、節の部分で少し曲がっているが、先端部の弭付近まで残っており、全体形が推定されるものである。全面に下巻きと刺繍状の文様帯が交互に施文され

ており、特に節の部分は、節をそのまま文様の一部に取り込み複雑に入り組んだ文様を施している。モチーフは規矩形の入組文や渦巻文を組み合わせて構成されており、非常に精緻なつくりであるが、モチーフの重複部分については切り合い関係が把握できない。どのようにしてこのような複雑なモチーフを棒状の弓に装飾するのか、明らかにし得ない。

また、この弓は14と同じように砂を混ぜたような4cm程の漆帯があり、長軸に沿って3個6列の小さな瘤が付付けられている。さらに、2.5cm程上部に5mmほどのリング状の漆帯があり、この部分に鐳状の装飾があったことが推測される。この瘤の付いた漆帯は、当初握の部分に相当するものと想定していたが、14と合わせて考察すると、鐳状の装飾と合わさって、一つの装飾表現の可能性が浮上してきた。

塗料層の分析では、顔料は使用されていなかったが、塗膜内に鉱物の存在が確認された。漆帯の瘤はこの鉱物に由来するものであることが推定された。

19はC1区とD1区出土のものが接合したもので、赤漆の塗られた丸木弓である。飾弓と丸木弓の中間的な様相を持つが、赤漆が塗られていることから、飾弓と考えておきたい。

17はD1区、18はE10区、20はD1区の出土であるが、弓としては短すぎるが、一応丸木弓の未製品として分類したものである。17は欠損しているが、片側の弣部分までが残存しており、弓身となる部分にケズリを施し成形している。

18は端部に弣状の切込みが見られるが、反対側は削られており、短身であることから丸木弓になるかは疑問が残るが、欠損品に再加工が施されたものと捉えることもできる。

20はやや太素材で、18と同様に弓としては短い。あるいは、未加工品の端部を切り落とした木棒状製品の未製品である可能性も残る。

(3) 容器・道具類

容器・道具類の木製品については、グリッド毎に説明を加えたい。容器類には赤漆を施した漆浅鉢、漆容器とした漆鉢、漆台付容器、漆脚付容器、漆杓子、台付容器、台付舟形容器、舟形容器、浅鉢、杓子などがあり、道具類では櫛、ヘラ状製品、石斧柄、工具柄、棒状製品等がある。他に、木製品として、板材や杭などがある。

なお、第160図3、第161図5、第168図3、第169図1、第172図1については、漆塗膜の分析を行った。

H3区の木製品 (第153～154図)

調査区最北のグリッドで、自然木等もあり多く出土していない地区である。打ち込まれている杭が存在する地区であるが、先端部を尖らせる加工を施した杭が4本、横たわった状態で出土した。いずれも芯持丸木で、第154図1が96.0cm、2が82.8cm、3が49.8cm、4が44.1cmを測り、大形の杭である。

I2区の木製品 (第155、156図)

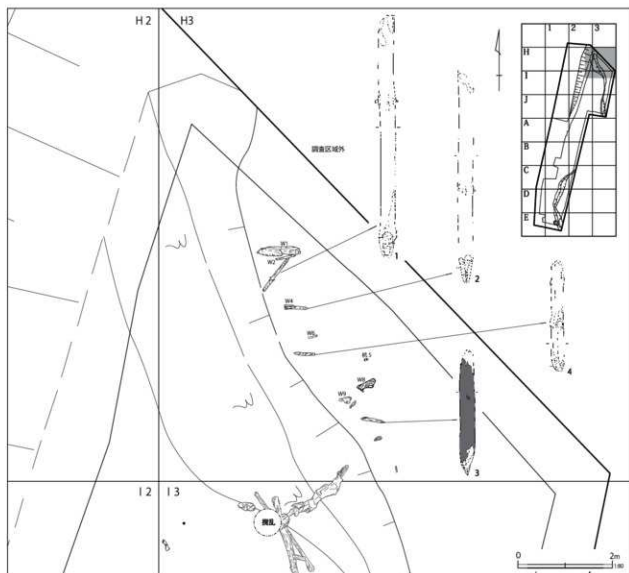
I2区は自然木集中区1の北側部分にあたり、大形の自然木等が分布する地区である。

1は漆台付容器で、径7.5cm、高さ3.8cmの高台が付く。赤漆は高台部では外面のみ、鉢部では内外面に塗られている。2は鉢の胴部で、内外面に赤漆が塗られている。

I3区の木製品 (第155、157、158図)

I3区は自然木集中区1の北側部分にあたり、調査区東側から台地裾部が伸びており、それに乗上げる形で自然木が集中して堆積していた地区である。

157図1は赤漆が塗られた浅鉢で、体部が内湾して開き、平底の底部が付く器形である。口径22.9cm、器高6.6cmを測る。



第 153 図 H3 区木器類分布図

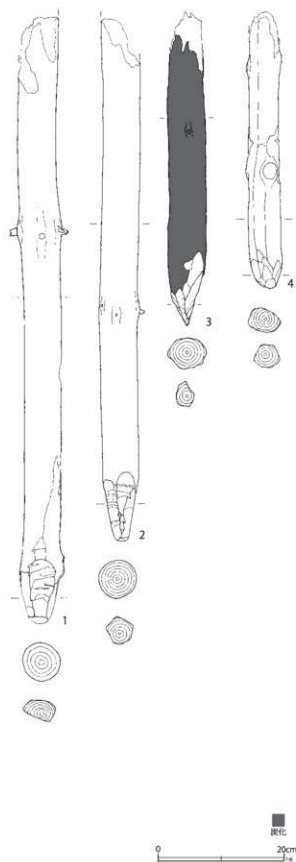
2は把手状の突起が付く、赤漆が塗られた容器で、鉢状を呈するものと思われる。外面には赤漆が、内面には赤漆を施した上に筆状工具で縁取りを施し、その中にやや色調の濃い赤漆が塗られている。

3は漆台付容器で、内外面に赤漆が塗られ、底径7.8cm、高さ2.2cmの高台が付く。幅20.2cm、現存高9.9cmを測る。

4は棒状製品であるが、おそらく櫂の柄と思われる。

5～7は櫂である。6、7は本来接合する同一個体で、4も同一破片であると思われる。5、7とも櫂の水かき部分は片面に調整加工が施され、片刃状を呈している。4、6、7は持ち手部分を欠損するが、合計すると全長115.4cm程になる。

8は櫂の未製品で、クスギのみかん割材を素材としており、柄の部分をやや細く、水かき部分をやや広く加工し始めているものと思われる。全長105cmを測る。



第154図 H3区木器類実測図

J2区の木製品（第159、160図）

J2区は調査区東側へ湾入する谷部の北側の開口部にあたり、自然木集中区1の南側の中心部で、大形木材をはじめ多量の自然木が集中していた地区である。

第160図1は、赤漆塗りの深身の鉢、もしくはは深鉢になるものと思われ、器体上部の文様帯に斜格子目文の中に異方向の集合沈線文が組み合うモチーフが刻まれており、土器と同じモチーフが施文されている。赤漆は内外面に施文されており、内部は大部分が剥落しているが、筆状工具で赤漆の縁取りが行われ、花卉状のモチーフが施文されている。

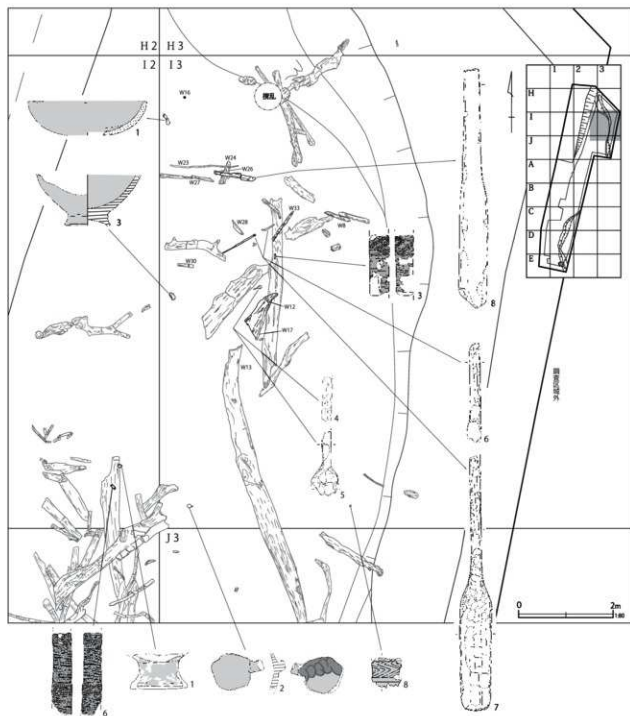
2は赤漆容器で、鉢の胴部破片と思われる。表面に平行線と斜線が組み合うモチーフが刻まれ、その上に赤漆が塗られている。裏面は赤漆の上に筆状工具による花卉状の縁取りが施され、区画内に赤みの強い漆が塗られている。

3は表裏面に赤漆を施し、口縁部に段部を設ける浅鉢と思われるが、口縁部がもう少し立つと、段部を持つ鉢となろう。表面には2と同様な先端の窄まる平行沈線が連結されるモチーフが刻まれており、連結部が菱形を構成する。内面は赤漆の上に、筆状工具で花卉状の縁取りが施されるが、縁取り内に漆の追加施文は見られない。推定口径26.5cmを測る。

漆塗膜の分析では、内外面の塗膜について分析を行った（第VI章第2項参照）。内面は表面から顔料を含んだ層が2層とその下に塗膜層が1層の合計3層が確認され、一番外側の1層に水銀朱、2層にベンガラが顔料として使用されていた。

外側は塗膜が4層確認され、一番外側の1層では水銀朱が、2、3層ではベンガラが顔料として使用されており、4層が漆塗膜であった。従って、表裏面とも発色の異なる赤漆が使い分けられて、文様が描かれていたことが推定された。

4は赤漆容器で、内外面に赤漆を塗った後に、



第155図 I 2・I 3区木器類分布図

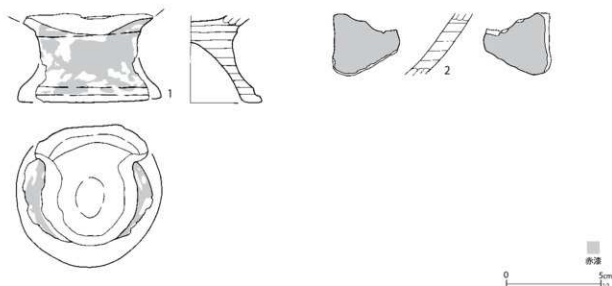
内面に赤みの強い赤漆が、縁取りをせずに帯状に施文されて文様が描かれていた。

J 3区の木製品 (第159、161～163図)

J 3区は、J 2区より湾口部のやや内側に入っ

ていることから、やはり大量の自然木と共に土器や木製品が出土した。

第161図1～3は口縁が内湾する赤漆の浅鉢で、2は内外面に2色の赤漆を使って文様が描かれている。特に内面は花卉状のモチーフが濃い色調の



第156図 Ⅰ2区木器類実測図

赤漆で描かれている。3も同様であるが、どのような文様を描いていたかは不明である。

4は口縁部が立つ器形で、外側にやや肥厚する口唇部を持つ。内外面に赤漆が塗られている。

5は山形の突起が付く浅鉢で、外面に赤漆を塗り、内面の突起下に弧線を重ねるようなモチーフが、帯状の赤みの強い漆で描かれている。

この土器の漆塗膜について、濃い赤色部分、外側部分、オレンジ部分の3ヶ所について分析した(第Ⅶ章第2項参照)。濃い赤色部分では、表面から水銀朱の塗膜2層、ベンガラ塗膜1層、漆塗膜1層の4層が確認された。外側部分もほぼ同様な、表面から水銀朱層2層、ベンガラ層1層、漆塗膜1層が検出された。オレンジ部分では、表面から水銀朱層1層、ベンガラ層1層、漆塗膜1層の3層が確認された。

第162図6、7は同一個体と思われる赤漆塗りの浅鉢で、やや肥厚して開く口縁部の外側と口唇部内側に濃い赤色の漆が塗られている。

8~10は浅鉢の口縁部で、9は口縁部に緩い稜が付けられている。いずれも赤漆が塗られている。

11、12は同一個体で、口縁部がやや開き、胴部に稜が付いて底部が丸くなるとされる鉢である。内外面とも赤漆が塗られている。推定口径21cmを

測る。

13、14は口縁部が開く器形の浅鉢で、9と同様に口縁部に稜を持っている。内面の赤漆塗膜は剥落しているようである。16も口縁部に稜を持ち、内面に文様が刻まれている。15は浅鉢の胴部で、外面に濃さの違う2種類の赤漆が塗られている。

17は赤漆の塗られた杓子と思われる。底部付近のみ現存する。

18は丸底の大きな鉢で、内外面に赤漆を塗り、内面にはさらに濃い色の赤漆が帯状に施文されて、モチーフが施文されている。

19は大形の鉢で、外面に渦巻文のモチーフが刻まれている。内外面とも赤漆が塗られているが、底部は剥落している。

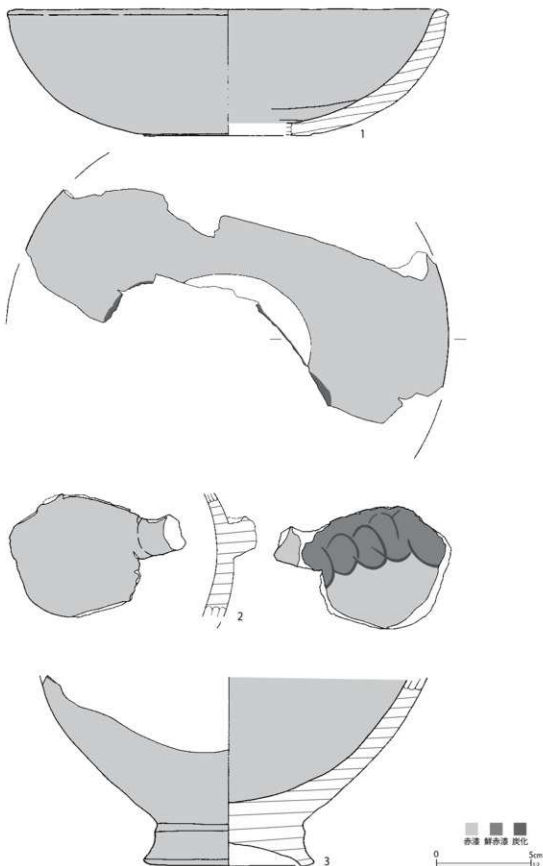
20は板状製品で、用途は不明である。クヌギ製の柁目取りである。21は短い先端部が削られているクリの杭である。

A2区の木製品(第164、165図)

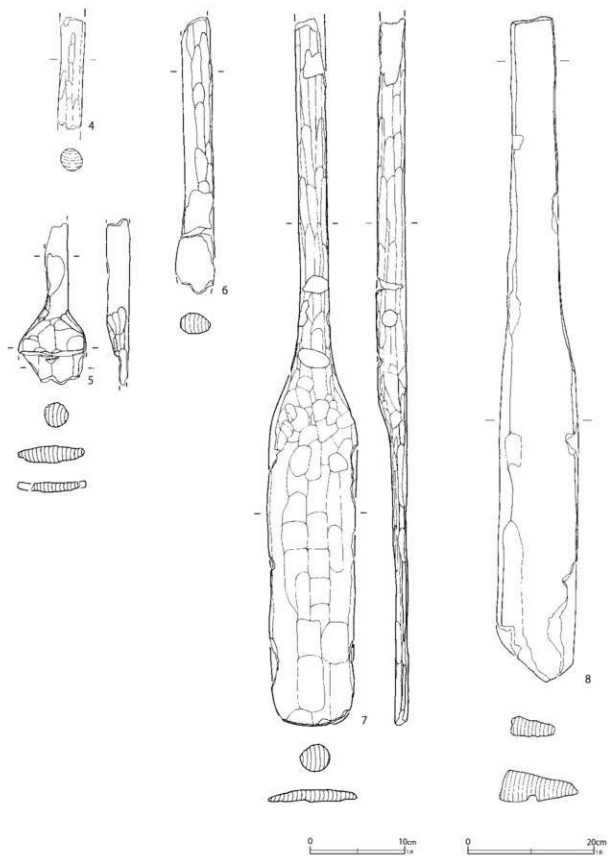
台地側に湾入する谷部の中央付近にあたり、調査面積も狭く、出土遺物も少なかった地区である。

第165図1、2は漆容器の胴部と思われる小片で、赤漆が塗られている。

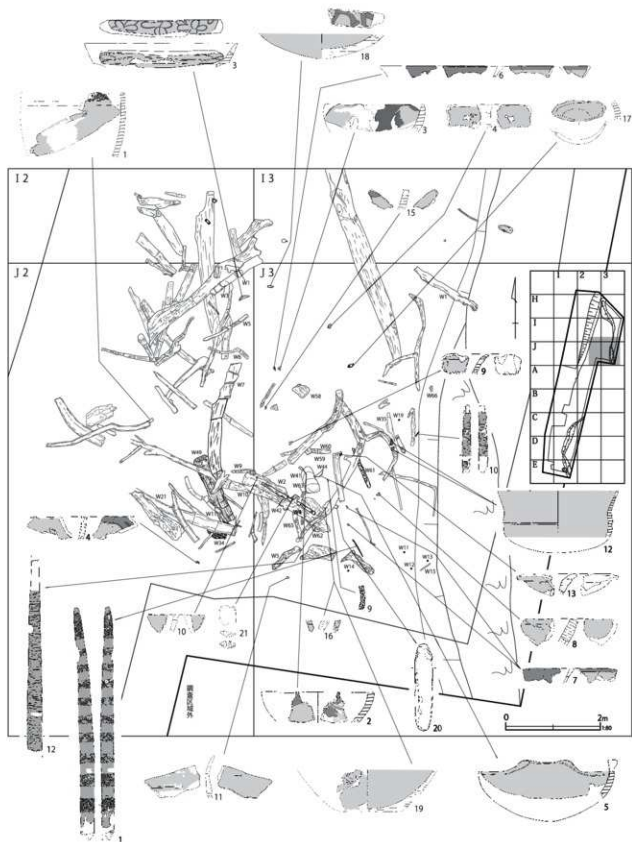
3はへら状の木製品で、クヌギ材の芯なし削り



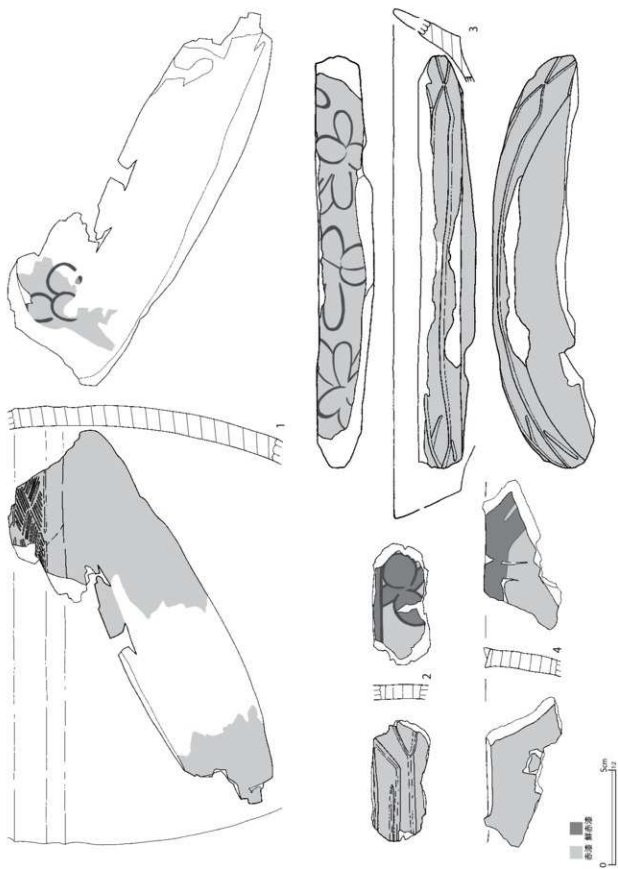
第 157 图 I-3 区木器類実測図 (1)



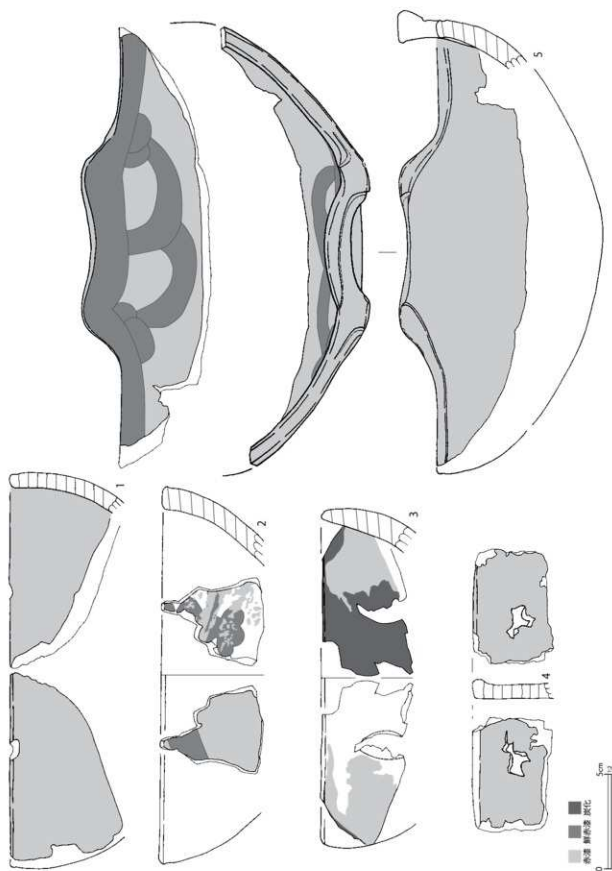
第158图 I-3区木器类实测图(2)



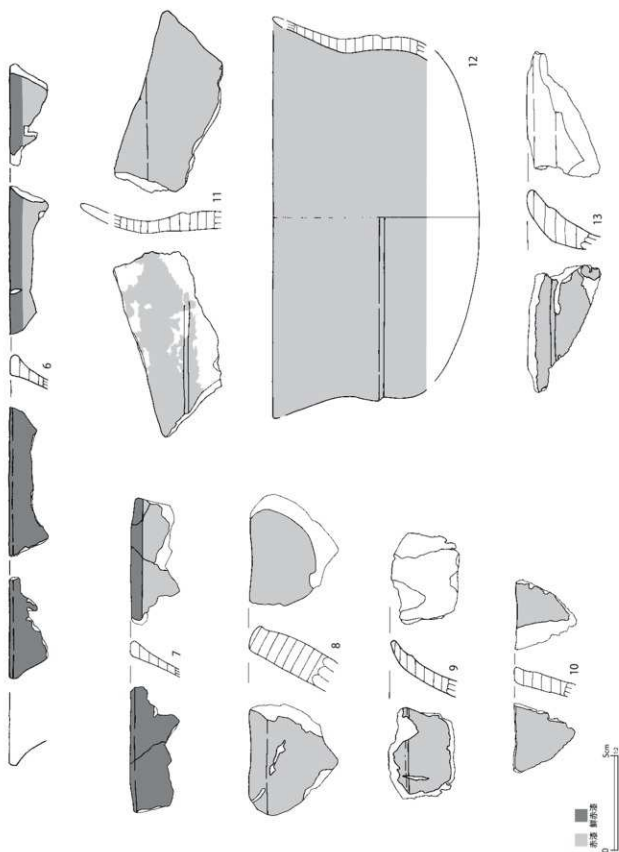
第159图 J2·J3区木器類分布図



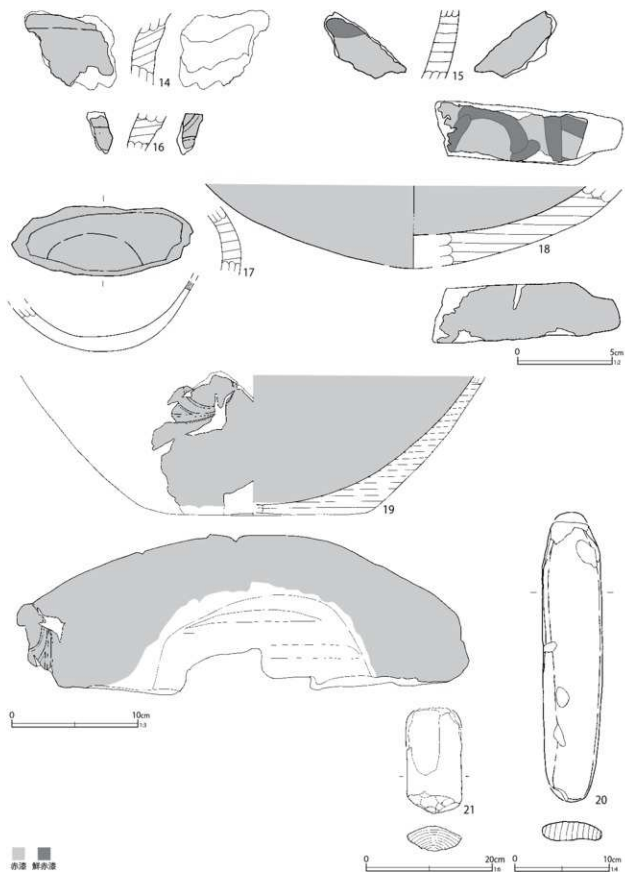
第 160 图 J 2 区木器类实测图



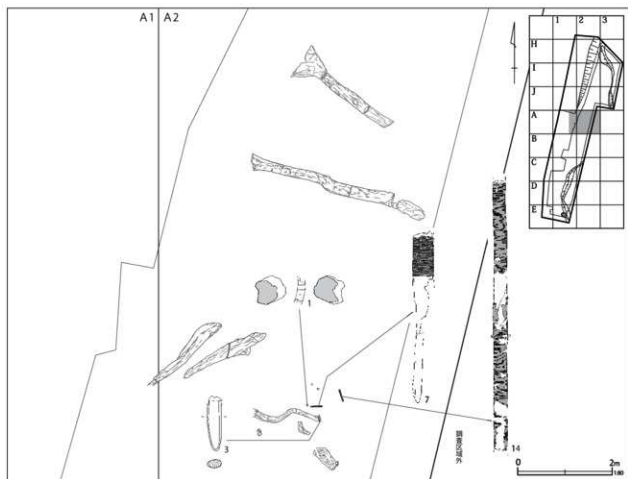
第 161 图 J 3 区木器類実測図 (1)



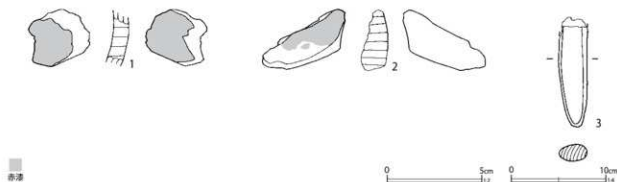
第 162 图 J 3 区木器類実測図 (2)



第 163 图 J 3 区木器類実測図 (3)



第164図 A1・A2区木器類分布図



第165図 A2区木器類実測図

出しで作られている。全体的に黒色を呈し、用途は不明である。

B1区の木製品（第166～168図）

台地側に湾入する谷の南側開口部のやや奥にあたり、自然木集中区2の中央部にあたる。丸木舟

や多量の自然木と土器や木器類の遺物が出土した地区である。

第167図1は赤漆塗りの脚付容器である。推定底径18cmほどの小形の容器であるが、底部の約4分の1が現存し、折れて欠損しているが脚が1カ所に認められる。復元すると、3～4本の脚が付

くものと思われる。脚の形状は三角形に近い楕円形の筒形を呈するものと推定される。1の器体の底部側面から脚部にかけて、鋸歯状文を上下に合わせて連続する菱形文もしくは格子目文を刻んでいる。赤漆は内外面に塗布されている。

2は1と同様なやや大き目の容器の脚と思われる。やはり、断面三角形の柱状で、外面と側面の境に稜を持っており、脚の中央部がやや括れる獣脚状の柱状を呈する。脚底面は剥落しているが、脚全体と、容器の内面に赤漆が塗られている。外面には底部側面から脚部にかけて、1と同様な連続菱形文か格子目文様が刻まれ、第160図3の菱形文を繋ぐ横位線と同様な構成が認められる。脚部の外面には中央部に「I」字状の印刻が施され、端部が受け口状の形状となり、脚底付近では球抱き状のモチーフを構成するようである。内面には赤漆を塗布した後、筆状工具で花卉状のモチーフが緑取られ、区画内に色の濃い赤漆が塗られている。

3は長楕円形で平らな底を持つ容器と思われるが、形状が定まらず、不確定な要素がある。外側の側面に斜格子状のモチーフが刻まれ、区画内にそれぞれ異方向の集合沈線が組み合う斜格子目文が施文されている。このモチーフは、加曾利B1式土器の文様と共通するもので、時期的にも平行期のものと考えられる。内面には赤漆の上に、筆状工具による緑取りが行われる文様と、緑取りが無く濃い色調の赤漆を帯状に施文して、円形や木葉状のモチーフが描かれている。

表裏面の漆塗膜の分析を行った（第VI章第2項参照）。内面は表面からベンガラを含んだ漆塗膜層1層、漆塗膜層1層の2層構造であることが、また、外面は表面からベンガラを含んだ漆塗膜層5層、漆塗膜層1層の6層構造であることが、それぞれ明らかになった。内面と外面の塗り回数異なることから、何度も塗り直した外面は、その強化の必要があったことが推測される。

4は有段の括れを持つ赤漆容器で、内面に緑取りのある濃い赤漆を塗った円形のモチーフが施文されている。

5は外面に細かな段を持つ赤漆容器で、外面に異方向集合沈線のモチーフが刻まれ、内面に緑取りのある濃い赤漆を塗った円形状モチーフが施文されている。

6はイヌガヤ製の細長い棒状製品で、一部に切込み状の傷がある。長さ43.6cm、径0.8cmの形状から、矢柄の末製品の可能性がある。

B2区の木製品（第166、169～170図）

自然木が集中していたB1区に続く地区である。

第169図1は内面に突出する突起が付く赤漆浅鉢で、内面の赤漆上に、緑取りの無い濃い赤漆が帯状に施文されて、同心円状のモチーフが施文されている。

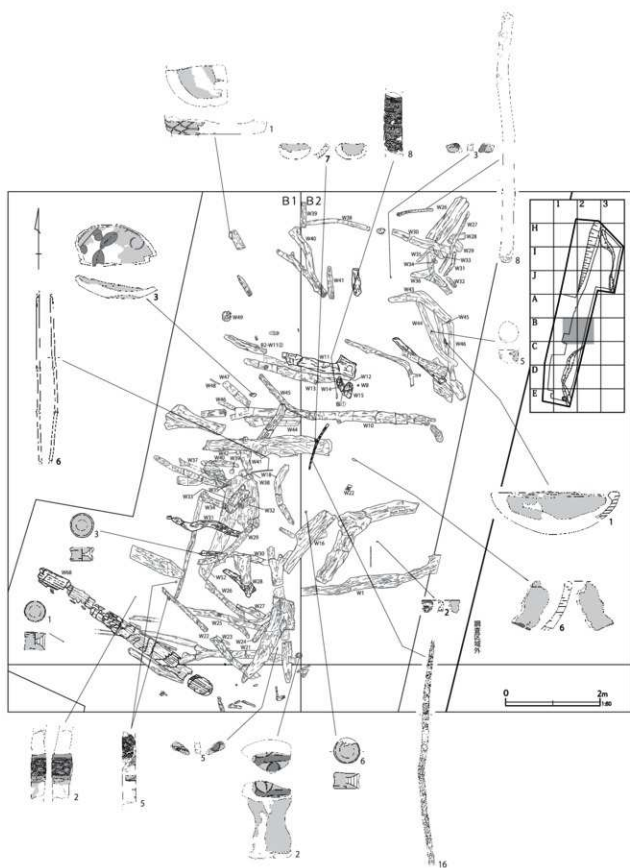
表裏面の漆塗膜の分析を行った（第VI章第2項参照）。内面は、表面からベンガラと水銀朱を含む漆塗膜層2層、水銀朱を含む漆塗膜層1層、漆塗膜層1層の合計5層からなるが、最下層に黒色粒子を含む層が確認された。外面は、表面からベンガラを含んだ漆塗膜層4層、漆塗膜層1層の合計5層、最下層に黒色粒子を含む層から構成されている事が確認された。内面に水銀朱を含む漆が塗られていたことは、模様を描くため、鮮やかな赤色が必要であったためであろうと推察される。

2、3は小破片であるが、異方向集合沈線を刻む体部破片である。

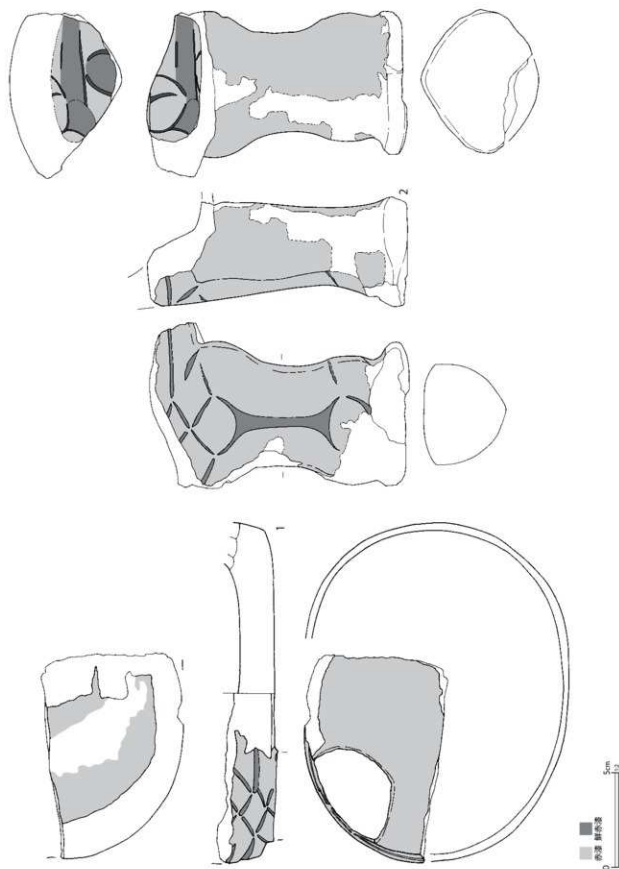
4、5は漆脚付容器の脚部であり、4は炭化しているが、一部赤漆を塗っている部分が残っている。

6、7は赤漆浅鉢で、6は口唇部直下に稜を持つ口縁部破片である。

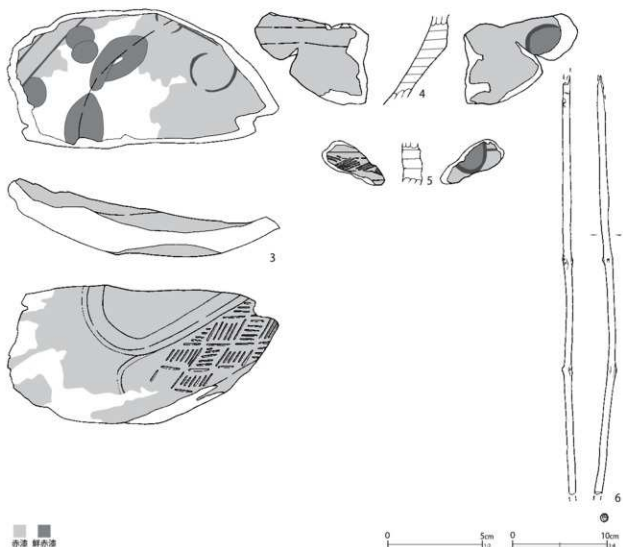
8は全長131.2cmを測るイヌガヤ製の杭状丸太で、先端部に加工が加えられている。太く、長い素材のイヌガヤであることから、他の木器の素材



第166图 B1·B2区木器類分布図



第 167 图 B1 区木器類実測図 (1)



第168図 B1区木器類実測図(2)

として切り出されてきた可能性が高いものと思われる。

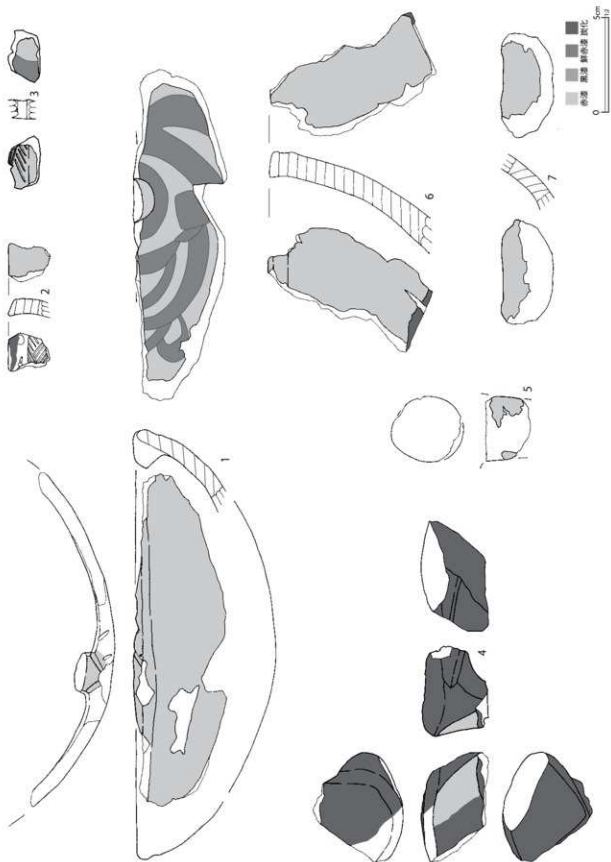
C1区の木製品(第171～177図)

C1区は台地側に流入する谷の湾口部南側の肩部で、自然木集中区2の南端にあたる。多量の木製品や自然木、土器等が出土している。

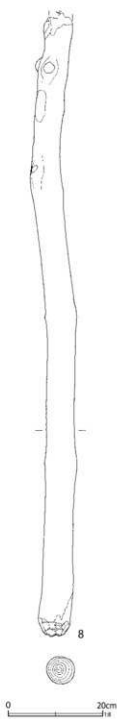
第172図1は口縁部が内湾気味に立ち、頸部で括れ、丸底の底部に至る器形を呈するものと思われる、口縁部に3段の稜を持ち、胴部にもおそらく2段の稜が施されて、区画されるものと思われる。口縁部には上下を稜で区画された文様帯内に、斜

格子目状区画内に異方向の集合沈線を充填するモチーフが施文されている。このモチーフは加曽利B1式土器に見られるものと同じであり、この容器の編年のな位置付けを示唆するものである。

この土器も表裏面の漆塗膜について分析を行った(第Ⅵ章第2項参照)。内面は、表面からベンガラを含む漆塗膜層1層、漆塗膜層1層、水銀朱を含む漆塗膜層3層、漆塗膜層1層の合計6層が確認された。また、外面は、表面からベンガラを含んだ漆塗膜層1層、水銀朱を含んだ漆塗膜層5層の合計6層が確認された。赤い発色の強い水銀朱の上に、何故ベンガラの赤漆を塗り重ねたかは不



第 169 图 B 2 区木器种类实测图 (1)



第170図 B2区木器類実測図(2)

明であるが、水銀朱できれいな赤漆容器であったものを、修復して使用するため重ね塗りをした際に、何らかの理由でベンガラ入りの赤漆を使用したものと推察される。

2～7は内湾して開く赤漆塗りの浅鉢の口縁部で、2～4は口唇部直下にケズリ込みが見られる。6は装飾された突起を持つ浅鉢の口縁部で、突起の付け根の両脇に刻みが施される。7は口縁部が開く器形である。

8は赤漆塗りの杓子である。イヌガヤ製で、細長い船底状を呈する底部のみ現存する。

9は赤漆塗りの鉢の胴部破片で、内面には筆状工具によって縁取られた内部に、濃い赤漆が塗られている。

10～16、18は赤漆容器の胴部破片で、16は底部もしくは胴部の稜にあたる破片である。

19はイヌガヤ製の赤漆容器の底部で、底径7.8cm、現存高1.8cmを測る。

17はトチノキ製の芯持丸太で作られた台付容器で、上面が長軸方向の皿状に窪んでいる。

20は片口の付くイヌガヤ製の浅鉢で、底部が丸底状を呈する。全体的に厚身で、未製品の可能性もある。径18cmを測る。

21～25は石斧の柄及びその未製品である。C1区からは4点が出土した。24以外はクヌギ製である。

21は石斧の着装部分が一部欠損するが、柄の部分から、石斧着装部までが現存する。柄は内側に反る形状で、グリップ部分が球形に成形され、石斧着装部の頭部までに段状の括れが3ヶ所に作り出される。さらに柄の内側に臍状の溝がグリップから着装部まで通して彫られている。石斧の着装は、頭部の着装部中央に縦位のスリットが施されていることから、そこに挟み込み緊縛したものと考えられる。ソケット状の当て具の存在は不明である。長さ33.2cm程であり、大きな木の伐採には不向きなものと思われる。

この柄の段状の作り出しは、装飾のためののか、機能的なもののためののか判断が付かないが、柄に括れ部を作ることとは強度を弱めることになると思われるので、臍状の溝に当て木をして、段部分で縛ることにより補強に繋げる機能を持たせたことも考えられる。

22はほぼ同じ形状の石斧柄で、頭部の石斧着装部分の構造がよく分かるものである。柄は頭部まで直線的で、グリップを丸く成形し、段部分が1段作り出されている。頭部の石斧着装部の根本部分に溝が彫られており、石斧着装用の当て具を緊縛するための機能も考えられる。柄の内側に臍状の溝は存在しない。長さ28.2cmで、21同様に大きな木の伐採には向かないものと思われる。

23～25は石斧柄の未製品である。

26は櫛の水かき部分の一部が現存したものである。水かき部は片面からの加工により、片刃状に成形されている。クヌギ製であり、現存値で幅6.4cm、長さ8.8cmを測る。

27は石斧柄頭部の欠損品と思われるが、実態は不明である。

28、29は棒状製品であるが、28はケズリ加工が施され、櫛の柄もしくは石斧の柄と思われる。

30は板材、31、33は丸木材で、32は丸木弓の素材であろうか。31、33はイヌガヤであることから、木器の素材になるものと思われる。

C2区の木製品（第171、178図）

第171図1は把手付きの赤漆容器で、扁平な水差し状の器形を呈する容器で、片側の一部が現存し、把手の上部を欠損する。

2、3は赤漆容器で、口縁部が内湾して開く器形である。

4はクリ材の板材である。

D10区の木製品（第179～182図）

D10区はD1区から続く台地の張り出しが谷へ

と沈み込む場所にあたり、自然木集中区3の端に相当する地区である。

第182図1、2赤漆容器の胴部破片で、1は口縁部に近い破片である。2は底部付近の破片で、内外面に赤漆が塗られている。

3は赤漆容器の胴部破片で、鉢などの器高の高い器種と思われる。外面には鋸歯状を合わせる菱形文様が刻まれている。内面は赤漆の上に筆状工具で縁取られた花卉状モチーフの中に、濃い赤漆が塗られている。

D1区の木製品（第179～181、183～189図）

調査区東側から台地の裾が張り出している地区で、自然木や木製品、土器などが多量に出土した自然木集中区3の中心部にあたる地区である。

1～3は口縁が内湾気味に開く赤漆浅鉢で、2は器壁が薄く、3は器壁が厚く作られ、口縁部内外面に濃い赤漆が帯状に塗られている。

4は口縁外端部が肥厚し、内面に突出する突起を持つ赤漆浅鉢で、突起の両裾に突起を取り巻く刻みが施されている。推定径約24cmを測る。

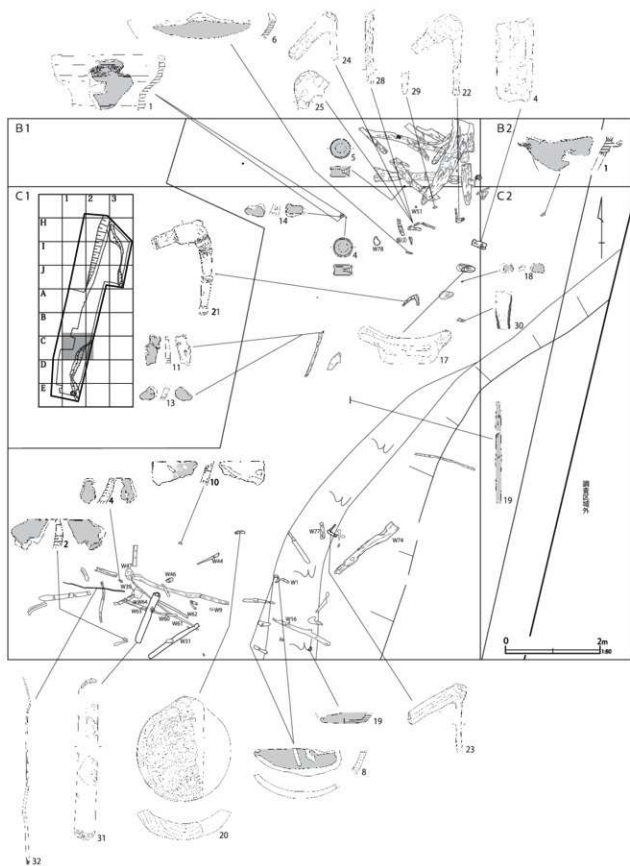
5は体部の丸い赤漆容器の破片で、大ききの割に器壁の厚い器である。

6～14は赤漆容器の口縁部破片である。6、14は口唇部が先尖り状を呈し、器壁の厚い器である。7、10、11は口縁部下に挟り状の成形が施されており、10は口縁部内外面に濃い赤漆が帯状に施文されている。

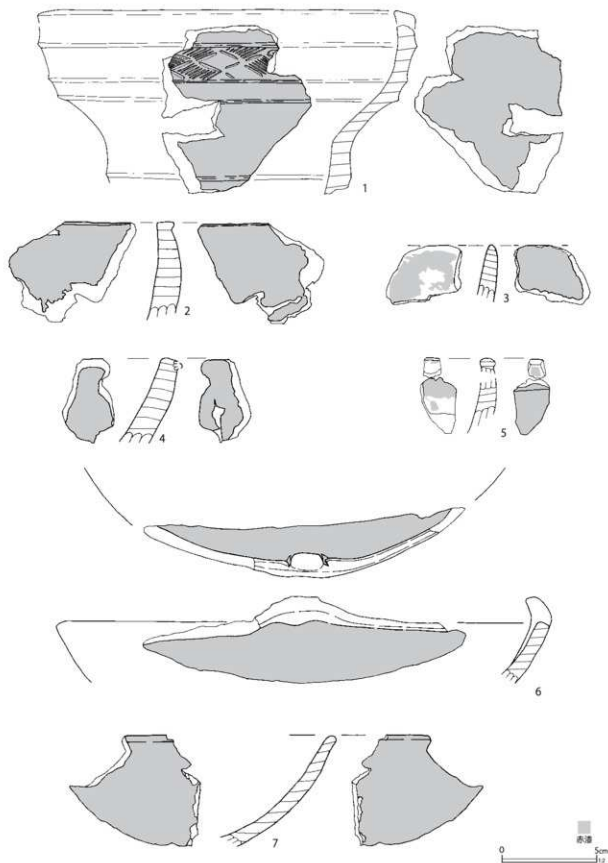
15、16は口縁状を呈するが、疑口縁の可能性もある。17は内面に濃い赤漆が塗られている部分がある。18、19も胴部部分で、口縁部に近い破片である。

20は赤漆塗りの杓子と思われる。湾曲が強く、胴部の一部が現存する。

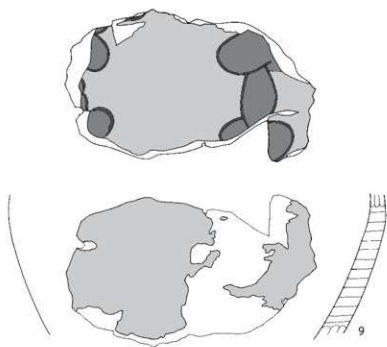
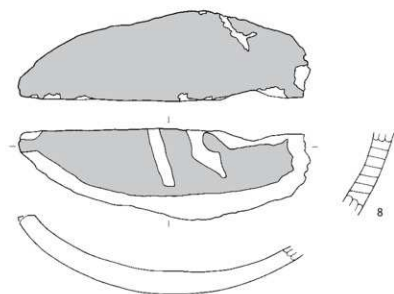
21は稜を持つ容器の胴部で、器高の高い鉢の胴部の可能性もある。



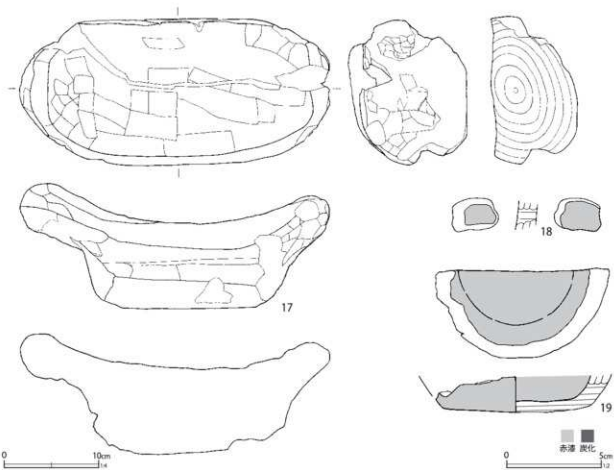
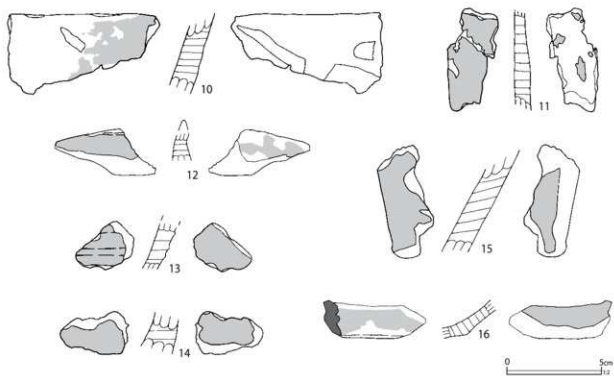
第 171 图 C 1 · C 2 区木器類分布図



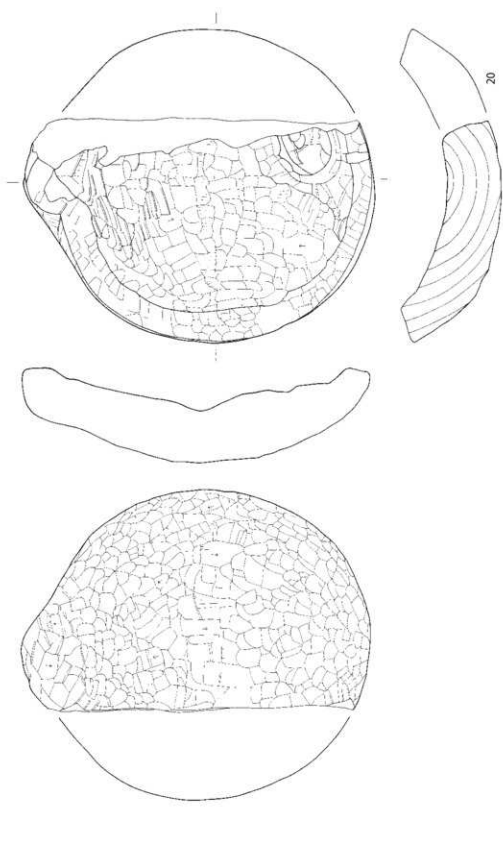
第 172 图 C 1 区木器种类实测图 (1)



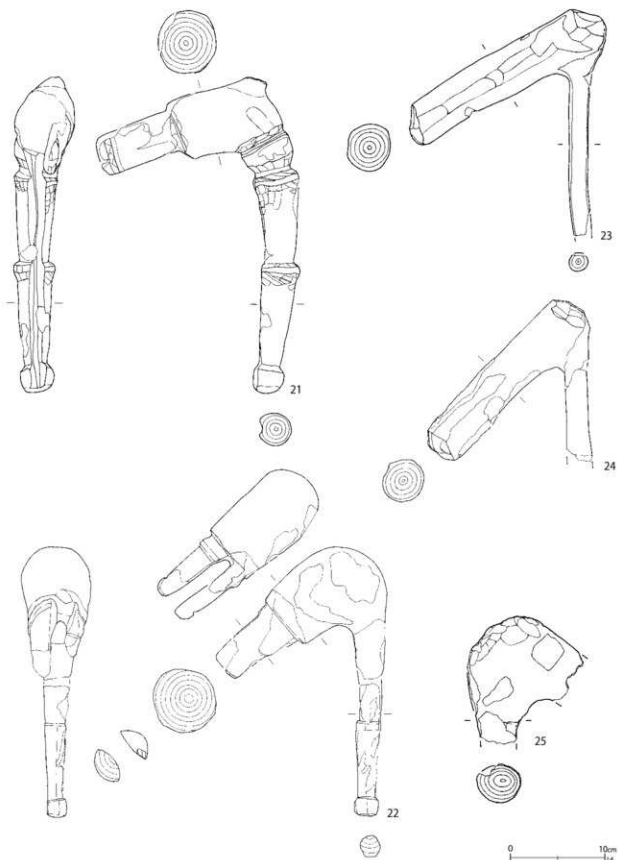
第 173 图 C1 区木器類実測图 (2)



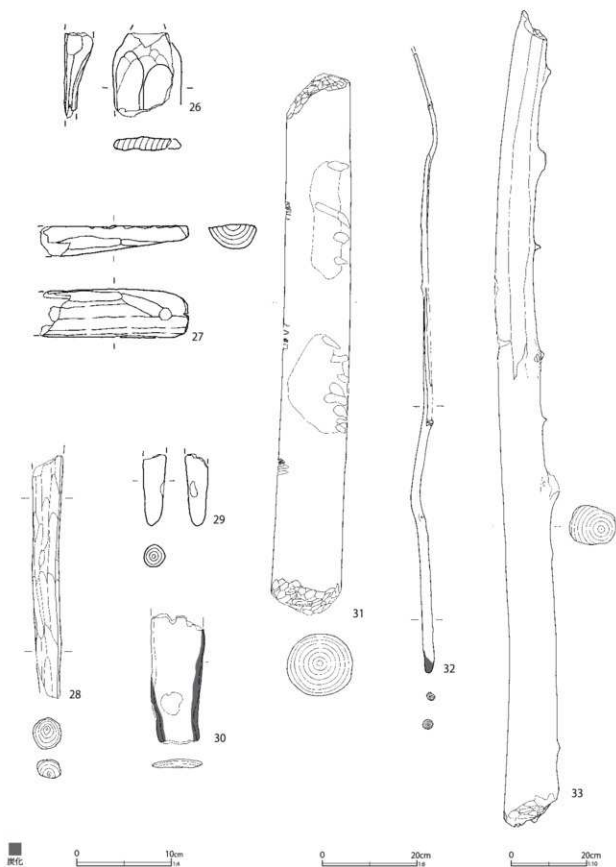
第174图 C1区木器類実測图(3)



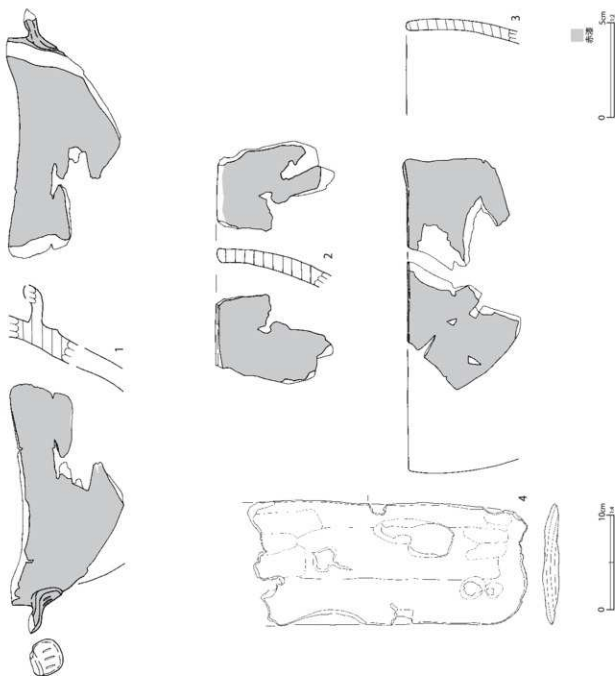
第175图 C1区木器類実測図(4)



第 176 图 C 1 区木器類実測図 (5)



第177图 C1区木器類実測図(6)



第178図 C2区木器類実測図

22～36は赤漆容器の体部破片である。22、24、26、33は器壁が厚く、大形の容器の可能性ある。

37は薄く扁平で緩く湾曲する形状であり、漆が塗られていることから、装身具の可能性ある。

38は径の小さな柱状を呈し、漆がぬられていることから、漆脚付容器の脚と思われる。

39はケズリが施される棒状製品である。

40は大形の赤漆台付容器で、一部が現存する。

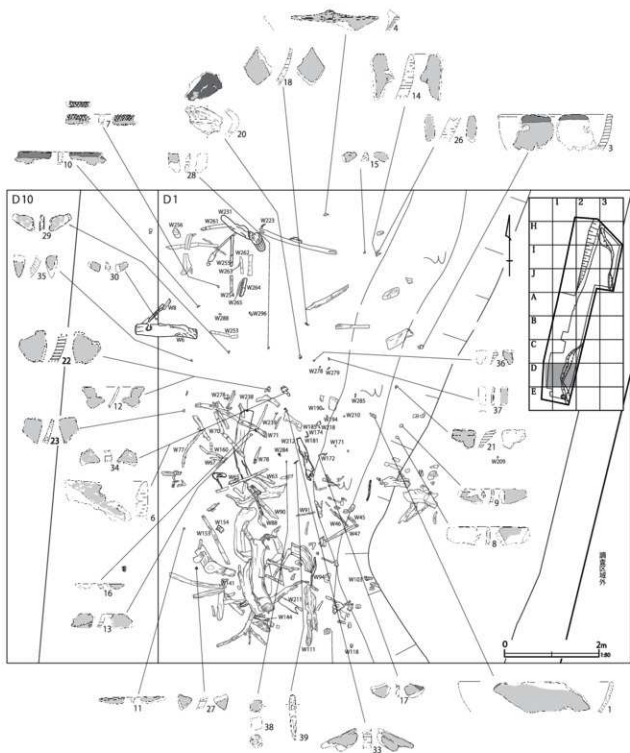
推定脚部底径は8.6cm、現存高6.4を測る。

41はクリ材の浅鉢で、底部が現存する。

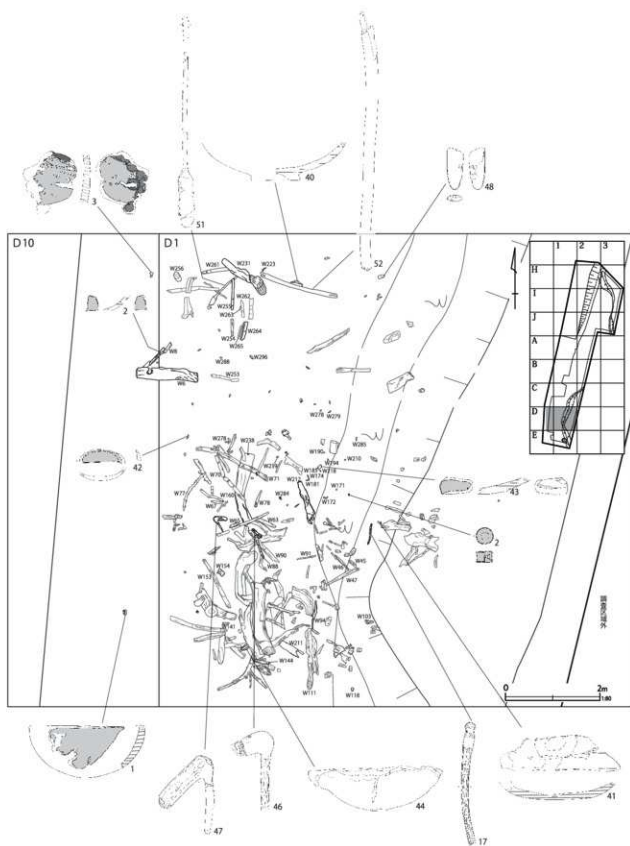
42は赤漆塗りの杓子で、底部が現存する。

43は赤漆塗器で、底部の破片である。

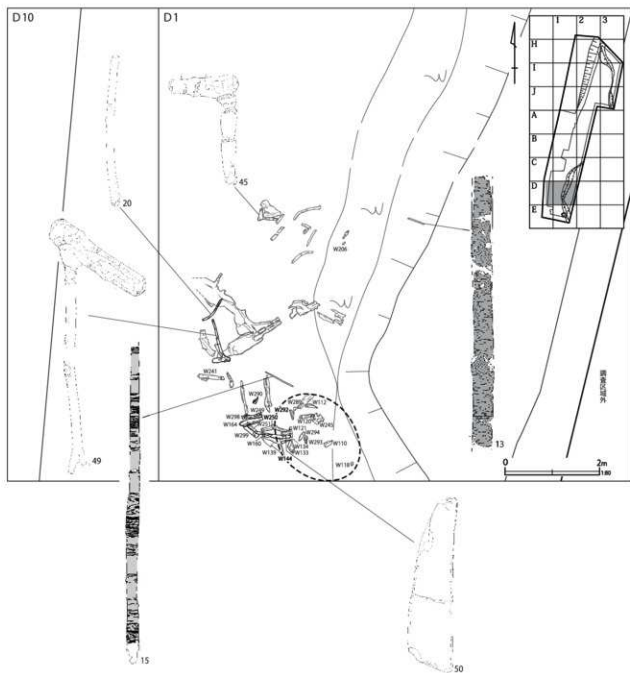
44はサクラ材の台付舟形容器である。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形で、丸木の芯を挟



第 179 图 D 10·D 1 区木器類分布图 (1)



第180图 D10·D1区木器類分布图(2)



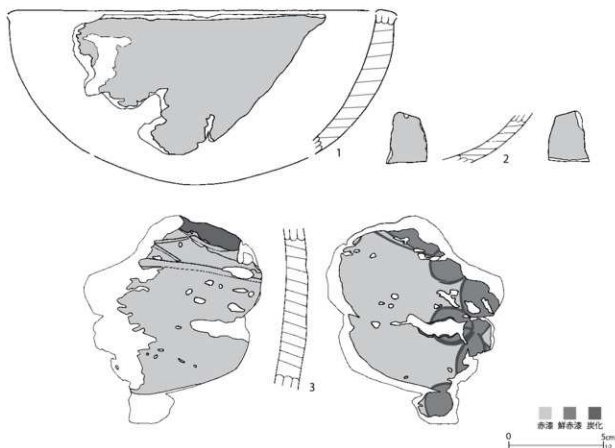
第181図 D10・D1区木器類分布図(3)

るように作られており。現存長径21cm、幅9.8cm、器高7.3cmを測る。底部には長径3cm程の四角い高台が作りだされている。

45～47、49は石斧の柄で、47、49は未製品である。素材は全てクヌギである。

45は長さ38.4cm、頭の長さ24.5cmを測る小形の石斧柄である。柄のグリップを球形状に成形し、頭

部の付け根までの柄に3段のケズリ込みによる段部を作り出し、頭部の石斧着装部にも段状の加工が施されている。柄の内側にはグリップ部から頭部の付け根まで通して臍状の溝が彫られており、C1区第176図21と同じ形状である。石斧着装部は頭部より細く作り出されており、縦位の溝が切られている。この溝に石斧を挟み、紐等で緊縛



第182図 D10区木器類実測図

するか、ソケット状の当て具を当てて縛るかのどちらかの着装方法が推測される。

46は柄の部分のケズリ痕が処理されていないことから、未製品の可能性もある。柄には段状の作り出しは行われていない。

47は未製品で、柄の頭部にケズリが施されたままの状態で廃棄されている。柄は短いことから、欠損していると思われる。

49は長さ89.2cmを測る大形の石斧柄の未製品である。40cm程の頭部に調整のケズリが施された状態で、柄の部分の加工は行われていない。

48、50は板状製品で、用途不明である。50は長さ94.8cm、幅23.4cm、厚さ3.6cmの大形の板材で、クリ材である。

51はクスギ製の櫛である。ほぼ完形で、長さ111.3cm、幅14.0cmを測る。水かき部分は片面か

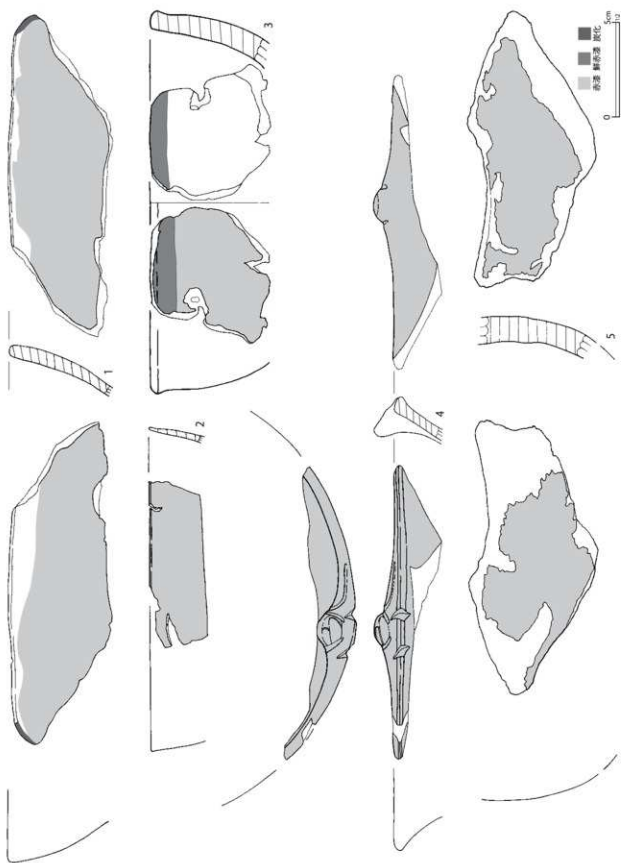
らの加工で、片刃状を呈する。持ち手部分は先端部がやや丸みを帯びて若干太く仕上げており、柄は丁寧に仕上げられている。

52はイヌガヤの丸太材である。長さ172cm、径8cmの材で、下端部に加工が施されている。

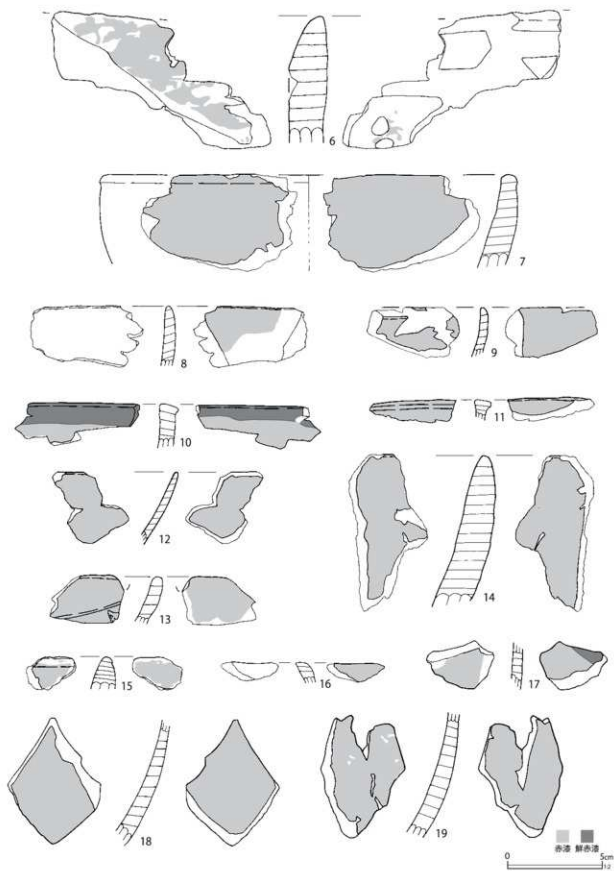
E10区の木製品（第190、191図）

調査区南西端の地区で、狭小であるため、木製品はほとんど検出されなかった。

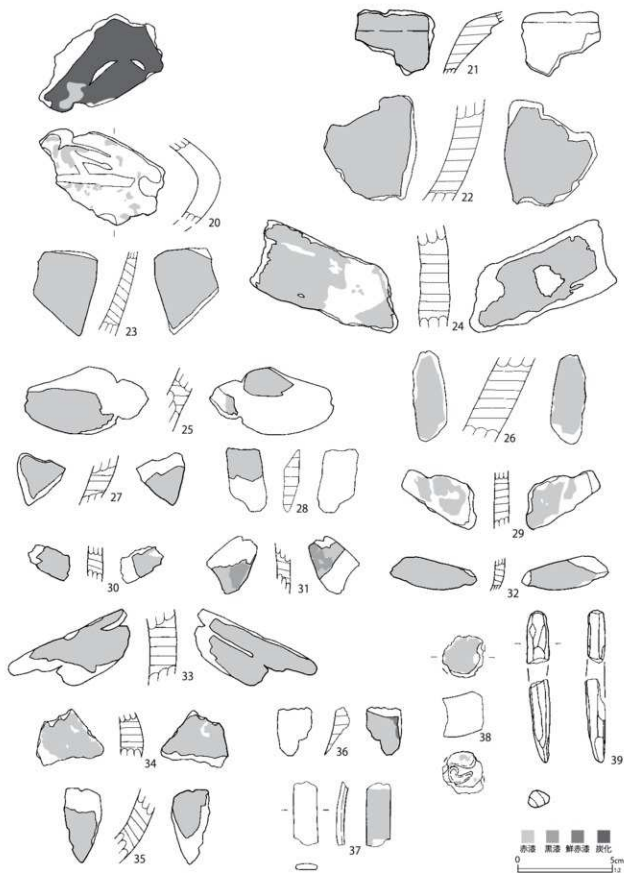
第191図1は赤漆容器の胴部破片である。内外面に赤漆が塗られ、内面には赤漆の上に円形モチーフとそれを繋ぐ帯状のモチーフが筆状工具で縁取られ、区画内に濃い赤漆が塗られ、モチーフが協調されている。やや大き目の鉢と思われ、材はサクラである。



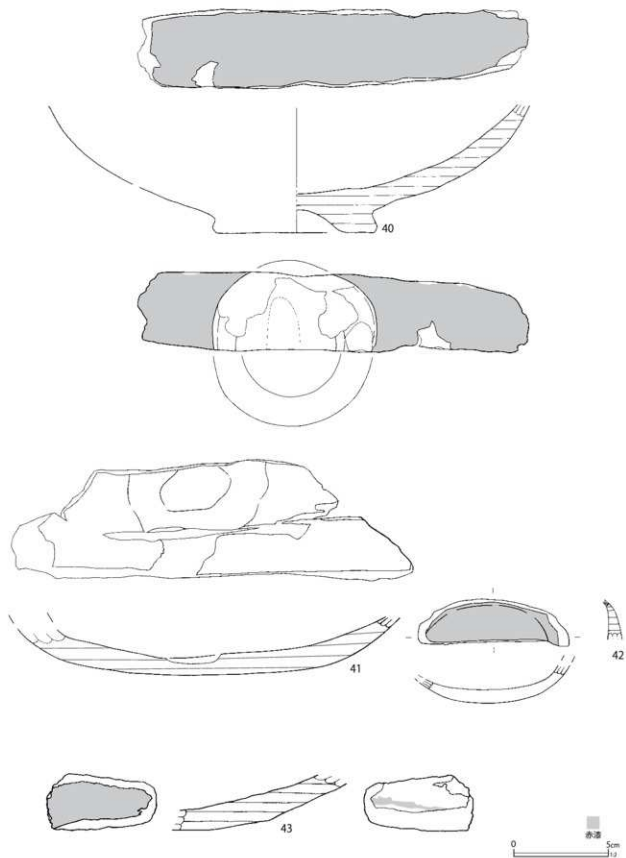
第 183 图 D 1 区木器類実測図 (1)



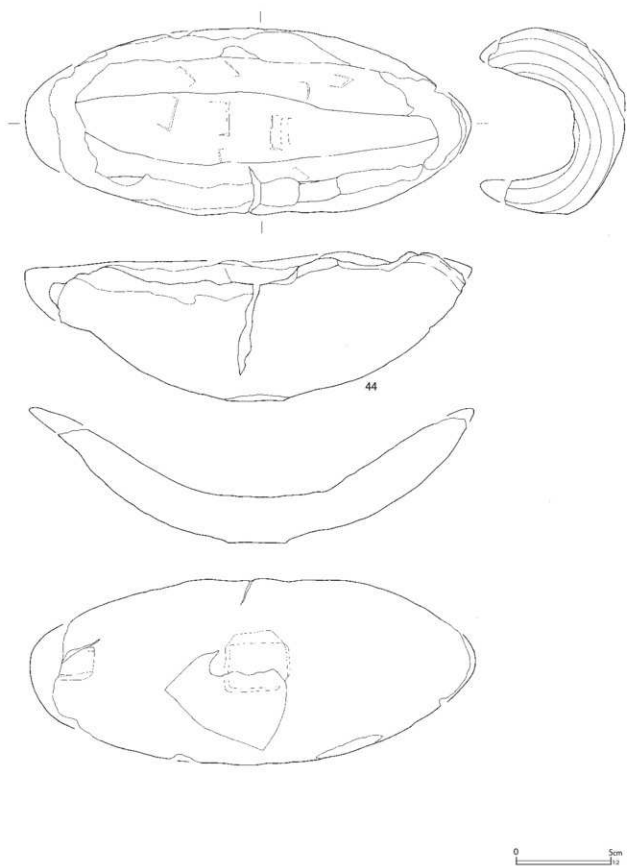
第184图 D1区木器种类实测图(2)



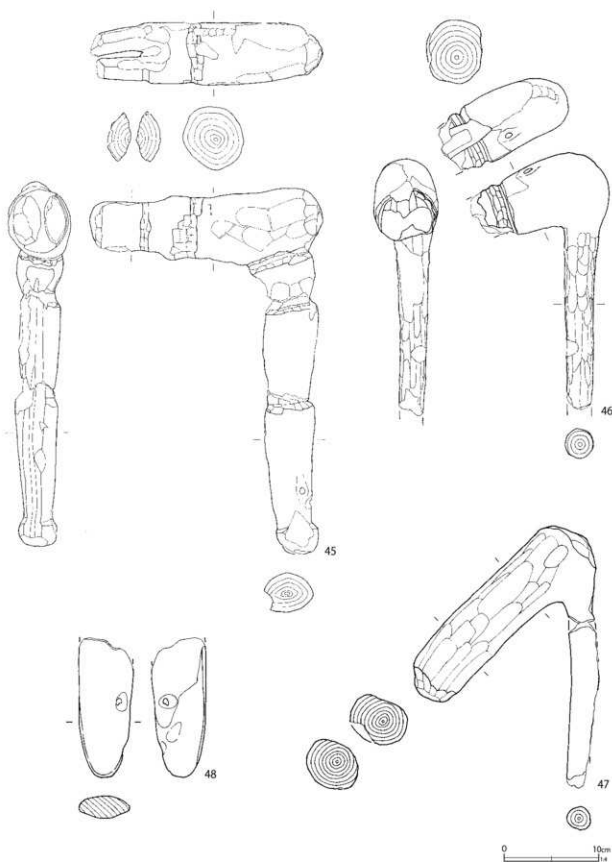
第 185 图 D 1 区木器類実測图 (3)



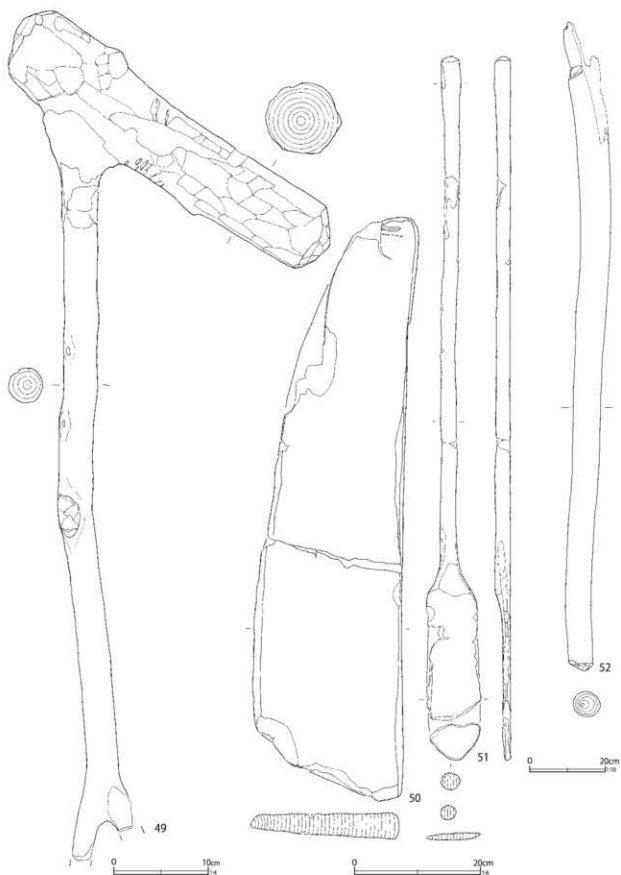
第 186 图 D1 区木器類実測図 (4)



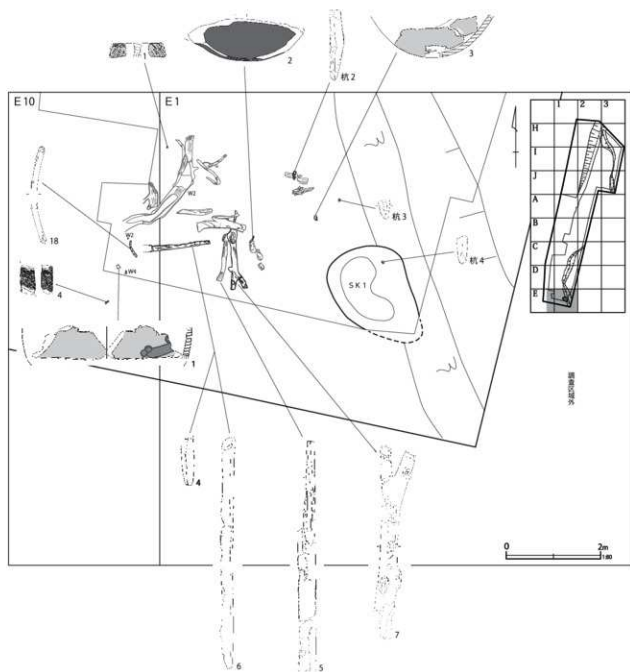
第187图 D1区木器類実測図(5)



第 188 图 D 1 区木器榫头测图 (6)



第189图 D1区木器类实测图(7)



第190図 E10・E1区木器類分布図

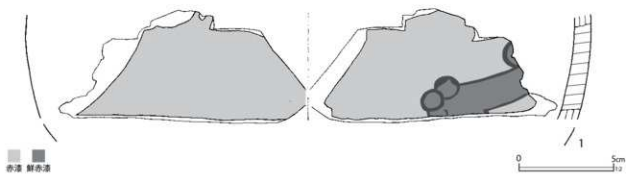
E1区の木製品 (第190、192、193図)

E10区に続く、調査区最南東端の調査区で、台地からの流水が流れ落ちる水道にあたり、土壌が存在する地区ではあるが、木製品等の出土遺物は少ない。

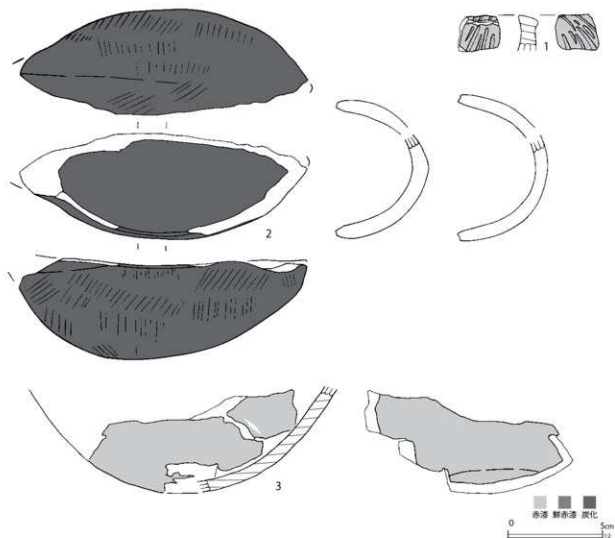
第192図1は赤漆塗容器の口縁部破片である。やや内湾気味に口縁部が立つ器形で、口縁部が肥

厚する外削状を呈する。口縁部の内外面には文様であるか傷であるか判断が難しいところであるが、斜位のモチーフ状の集合線が施されている。

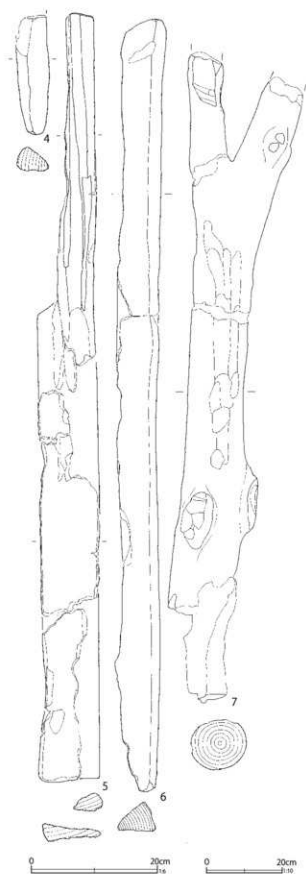
2はイヌガヤ製の杓子であり、全体が炭化して黒色化している。現存部の長径15.0cm、幅5.8cm、高さ6.2cmを測る。底部が残るのみであるが、実測図左側に把手が付く可能性がある。



第 191 图 E 10 区木器類実測図



第 192 图 E 1 区木器類実測図 (1)



第193図 E1区木器類実測図(2)

3は赤漆浅鉢の底部で、丸底を呈する。サクラを素材とする。

4はクスギのみかん割材を素材とする杭である。長さは18.6cmを測る。

5は櫃の未製品と思われる。クリの板目材を利用しており、上半部に柄としての加工を始めているようである。長さは122.1cmである。

6はクスギ材のみかん割材で、長さ123.0cm、幅6.6cm、厚さ4.8cmを測る。杭であろうか。

7はクリの丸太材で、Y字状の二股まで現存する。長さ171.0cm、径18.0cmで、建築部材であると思われる。

表面採集の木製品(第194、195図)

1は赤漆浅鉢の口縁部破片で、口縁部内外の赤漆の上に、濃い赤漆を塗っている。

2、4は遺跡確認の試掘の際に出土した木製品で、1は口縁部が外反する浅鉢と思われる。2は内外面に赤漆を塗った浅鉢の胴部破片である。

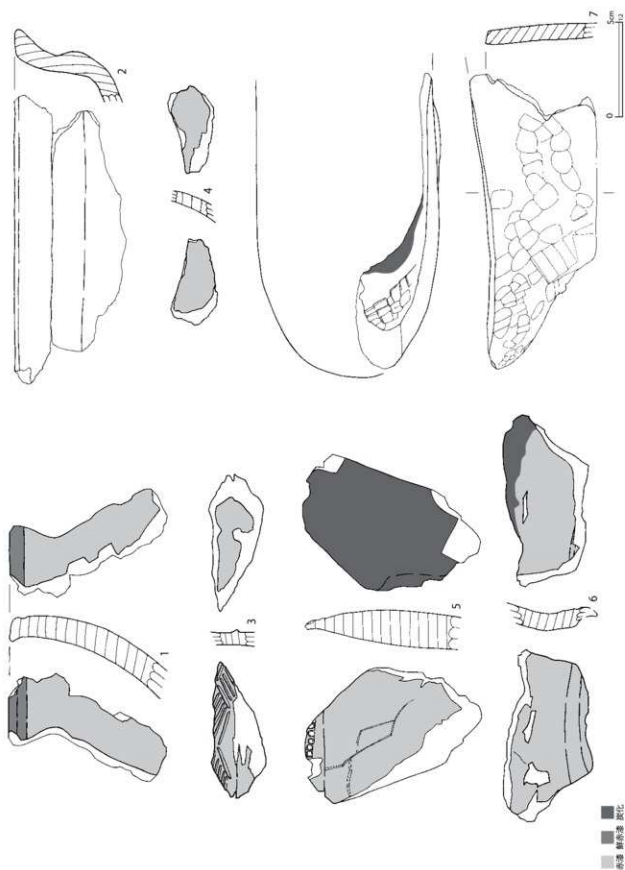
3は口縁部近くの破片と思われるが、器壁に稜を持ち、稜より上に集合沈線を組み合わせる斜格子目文を刻む、鉢の胴部破片である。内外面とも赤漆を施文する。

5は鉢の口縁部付近と思われるが、破片の上端に刺突列が見られる。内外面とも赤漆を塗るが、内面は炭化して黒色を呈する。

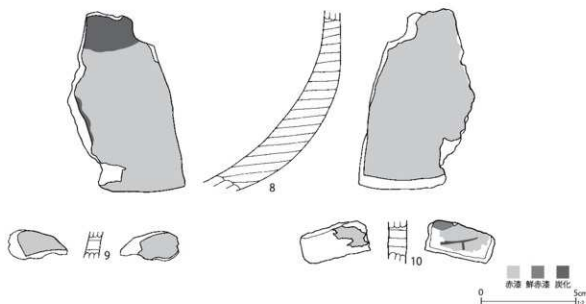
6は胴部が括れる赤漆容器の、胴部下半の破片と思われる。

7は扁平横長の容器で、舟形容器もしくは水差し状の容器と思われる。側面しか残存しないが、先端部が片口状に張り出している。

8～10は赤漆容器で、8は器壁が厚いことから大形の鉢である可能性がある。9、10は胴部破片で、10の内面には赤漆の上に、濃い赤漆が塗られている部分がある。



第194図 表採木器類実測図(1)



第195図 表採木器類実測図(2)

(4) 丸木舟 (第196～198図)

丸木舟は2艘出土している。

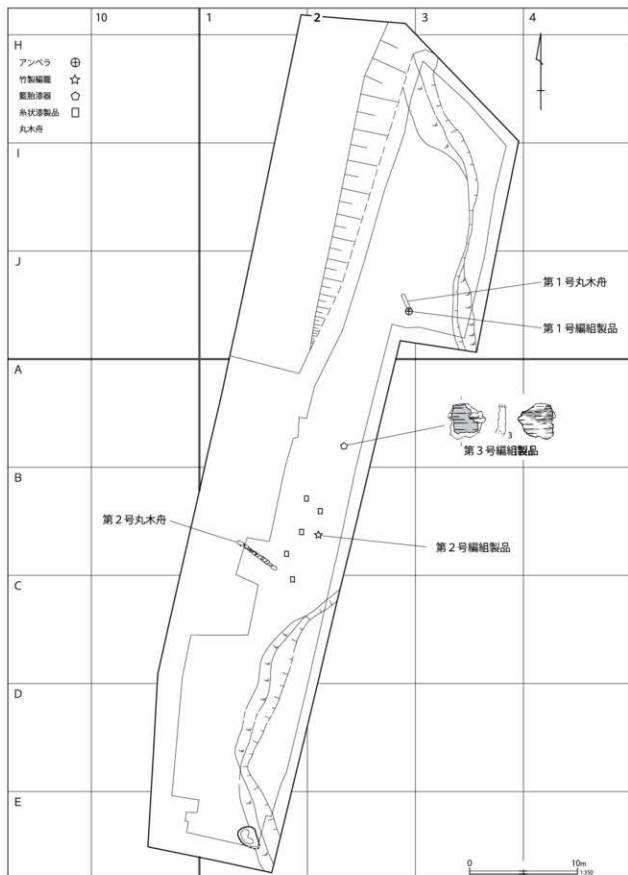
第1号丸木舟 (第196、197図)

J2区から出土した。調査区東側から続く台地裾部の斜面に沿って堆積した砂層上に、斜面の傾斜に対しておよそ直角方向に横たわり、船尾を北西方向に向けた状態で出土した。舟は船尾と思われる立ち上がりを残し、両側の船縁が欠損している。現存部分は、船尾が首を擡げたような形状で、両船縁が無く、平行の板材状を呈することから、廃材に二次加工を施して再利用されていた可能性もある。クリを素材とし、長さ150.0cm、幅31.5cm、厚さ5.5cmを測る。非常に遺存状態が悪く、取り上げの際に形状を残さずばらばらの状態になってしまった。放射性炭素年代測定(第VI章第5項参照)を行ったところ、 $3,420 \pm 30\text{BP}$ (calBP3, 811–3, 588)の年代値を得た。およそ、加曽利B2式期に相当する。

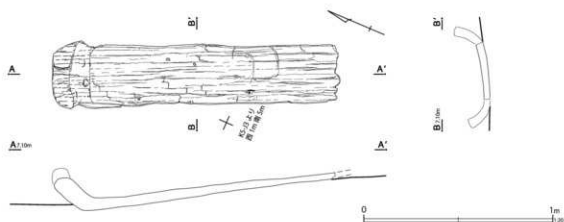
第2号丸木舟 (第196、198図)

B1区からC1区にまたがって出土した。第2

号丸木舟が出土した地点は、東側の台地方向に湾入する谷の湾口部南側のやや沖にあたり、船尾が出土した付近で急に谷が深くなる場所である。第2号丸木舟はこの谷に堆積した砂層の上から出土しており、第198図に示したように谷に堆積した砂層の傾斜に沿って、船首を南東方向に向け、砂の上に打ち上げられたか、もしくは繋がれていたかのような状態で出土した。船尾は当初攪乱を受けて調査対象範囲外になっていた部分に入っており、攪乱部分に調査範囲を拡張して丁寧に調査したところ、図示した範囲までかろうじて残っていた。遺存状態は悪く、調査時点ですでに舟体にひびが入り細かく分割されていた。取り上げについては、ひび割れの単位で下層の砂層とともに切り出して取り上げたが、その後接合等は叶わなかった。船首はかろうじて船首と判断できる形状を呈しており、船底は丸く残っていたが、船縁は欠損していた。クリを素材とし、全長453.0cm、幅38.5cm、厚さ4.0cmを測る。放射性炭素年代測定を行ったところ、 $3,555 \pm 20\text{BP}$ (calBP3, 905–3, 825)の年代値を得た。およそ、加曽利B1式期に相当する。



第196図 丸木舟・編組製品分布図



第197図 第1号丸木舟出土状況図

6. 編組製品

(1) アンペラ (第196、199図1)

1は第1号編組製品としたもので、J2区から出土したアンペラ状の編組製品である。半割状のササ類を3本1組単位で編んでいるが、縦材と横材では表裏を逆にしている。ササは幅1.2cm～1.6cm程を測るが、節の部分を合わせるように3本組にして編み込まれている。調査時にはすでに編み込みが緩く崩れており、40×50cm程の範囲で一部が残存していたものである。

(2) 籃胎漆器 (第196、199図2、3)

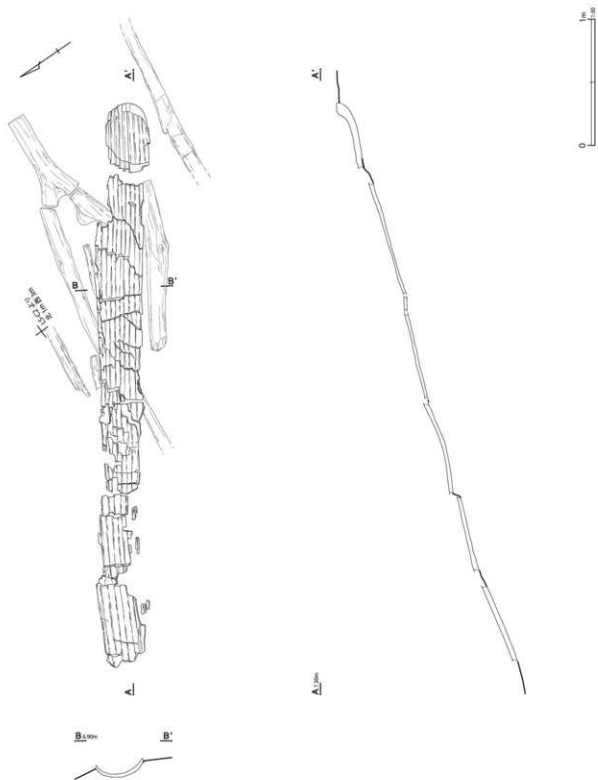
2は第2号編組製品、3は第3号編組製品としたもので、ササ類の編み籠に漆が塗られている籃胎漆器で、2はB2区、3はA2区から出土した。2は14cm×7cm程の破片で、幾つかに割れた状態で出土した。破片の上端で編み方が変わっており、体部が2越え1潜り1送りの飛びごさ目編みで、上端部9段がごさ目編みになっている。表面に薄く漆が塗られた籃胎漆器であることが確かめられた。細部2点についてタテ・ヨコ材の分析と年代測定及び漆の分析を行った(第VI章第2、3項参照)。素材は竹笹類で竹類か笹類の区別は困難であり、2点の内1点はタテ材が幅2mm、厚さ0.28mm、ヨコ材が幅1～2.2mm、厚さ0.23mmで、もう1点はタテ材が幅1.2～2mm、厚さ0.26mm、

ヨコ材が幅1.2～2mm、厚さ0.22mmで、縦材の方が若干幅広で厚みがあるが、ほぼ同様な材が使用されている。放射性炭素年代測定では、3,640～3,589calBP(1SD)の値が得られ、後期加曽利B2式に相当する年代が得られた。漆膜は茶色塗料層2層が確認されたが、塗料は明らかにできなかった。

3は第3号編組製品で漆が厚く塗られた3cm弱の破片で、漆の下からヨコ添え巻き付け編みの一部が観察されたことから、X線CT画像による解析、素材の同定及び年代測定(第VI章第1、3項参照)を行った。CT画像の分析から、4段のヨコ添え巻き付け編みが確認され、材は2と同様に竹笹類で、ヨコ添え材は幅2.3mm以上、厚さ0.36mmを測る。年代は3,577～3,511calBP(1SD)、3,611～3,476calBP(2SD)の値が得られ、およそ加曽利B2式相当の年代が得られた。

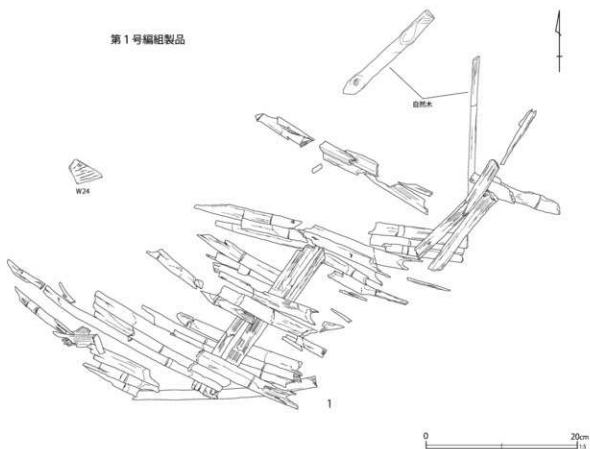
(3) 糸状漆製品

B1・2区を中心にJ3区、C1区から微細な糸状漆製品が出土した。細いもので径0.5mm～8mm、長さ6mm～30mmまでのものが、数十本出土しており、実測等が行えなかったため、写真を掲載し(図版120)、一部漆塗膜の分析を行った(第VI章第2項参考)。



第198図 第2号丸木舟出土状況図

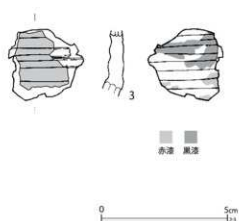
第1号編組製品



第2号編組製品



第3号編組製品



第199図 編組製品実測図

第24表 木製品一覧表

国番	器種	横cm	縦cm	厚さcm	底径cm	木取り	樹種	取上番号	分析番号
16	1 割材	6.9	47.4	6.0		板目	クリ	D1-w112	2329
	2 板材	18.0	57.6	3.6		割材	クリ	D1-w292	2317
	3 板材	12.6	87.0	2.0		板目	クリ	D1-133-1・133-2	2312
	4 加工材	9.6	53.1	3.6		割材	クリ	D1-w289	2316
	5 杭	11.4	64.2	6.3		みかん割	クリ	D1-w294	2326
	6 杭	21.0	56.1	2.4		みかん割	コナラ属クスギ節	D1-w245	2324
	7 杭	9.0	19.5	4.8		半割り	コナラ属コナラ節	D1-w110-2	2332
	8 加工材	7.2	14.7	3.6		みかん割	コナラ属クスギ節	D1-w118	2330
	9 杭	6.6	70.8	6.6		芯持丸木	クリ	D1-w120-1・120-2	2331
	10 加工材	11.4	84.0	9.6		芯持丸木	クリ	D1-w293	2318
19	1 杭	5.4	21.0	4.5		みかん割	クリ	D1-w290	2335
	2 杭	3.8	27.6	3.3		みかん割削り出し	コナラ属クスギ節	E1-w22	2321
	3 杭	4.8	7.8	3.0		みかん割	コナラ属クスギ節	E1-w20	2328
	4 杭	4.2	10.8	3.0		みかん割	コナラ属クスギ節	E1-w21	2319
	5 杭	4.2	38.1	4.2				H3-w15	
	6 杭	10.2	111.0	10.2				J2-w51	
148	1 耳栓	2.1	2.1	1.8		不明	マツ属	B1-w57	2260
	2 耳栓	2.3	2.2	1.4		縦木取り	イヌガヤ	D1-w9	2243
	3 耳栓	2.4	2.4	1.4		縦木取り	マツ属複雑管束亜属	B1-w51	2241
	4 耳栓	2.6	2.6	1.4				C1-w24	
	5 耳栓	2.7	2.6	1.4		不明	マツ属複雑管束亜属	C1-w48	2261
	6 耳栓	2.6	2.2	1.6		縦木取り	マツ属複雑管束亜属	B2-w20	2242
	7 櫛	3.3	1.5	0.7				D1-w291	
	8 櫛	3.0	3.0	1.0				I3-w18	
	9 腕輪状木製品	0.6	3.2	0.6				J3-w23	
150	1 飾弓	2.6	40.8	2.4		芯持丸木	ニシキギ属	J3-w24	2257
	2 飾弓	2.0	9.0	1.9		芯持丸木	ニシキギ属	B1-w50	2248
	3 飾弓	2.6	8.0	2.5		芯持丸木	ニシキギ属	I3-w20	2247
	4 飾弓	2.0	4.0	1.4		芯持丸木	ニシキギ属	E10-w6	2244
	5 飾弓	1.7	9.7	1.5		芯持丸木	ニシキギ属	B1-w16・17	2245・2246
	6 飾弓	2.8	11.0	2.6		芯持丸木	ニシキギ属	I2-w12	2250
	7 飾弓	2.7	22.4	2.3				A2-w9	
	8 飾弓	2.3	8.3	2.3		芯持丸木	ニシキギ属	B2-w9	2253
	9 飾弓	2.8	4.8	1.9		芯持丸木	クリ	B2	2297
151	10 飾弓	1.5	11.8	1.6		芯なし削り出し	ニシキギ属	J3-w46	2249
	11 飾弓	2.5	11.6	2.7		芯持丸木	ニシキギ属	D1	2252
	12 飾弓	2.6	33.6	2.5		芯持丸木	ニシキギ属	J3-w54	2254
	13 飾弓	2.4	35.4	1.6		芯持丸木	ニシキギ属	D1-w287	2255
	14 飾弓	2.7	53.7	2.7		芯持丸木	ニシキギ属	A2-w5	2256
	15 飾弓	2.6	62.7	1.8		芯持丸木	ニシキギ属	D1-w274	2259
152	16 飾弓	2.8	99.5	2.8		芯持丸木	ニシキギ属	B2-w23	2258
	17 丸木弓	3.6	42.6	3.6		芯持丸木	イヌガヤ	D1-w37	2296
	18 丸木弓	1.6	25.6	1.6		芯持丸木	イヌガヤ	E10-w5	2294
	19 飾弓	1.6	26.8	1.0		芯持丸木	イヌガヤ	C1-w53・D1-w174.181	2251
	20 丸木弓	2.8	52.8	2.5		芯持丸木	イヌガヤ	D1-w236	2295
154	1 杭	6.0	96.0	6.0		芯持丸木	マツ属複雑管束亜属	H3-w3	2339
	2 杭	6.0	82.8	6.0		芯持丸木	アカマツ	H3-w5	2338
	3 杭	6.0	49.8	6.0		芯持丸木	アスナロ	H3-w11	2333
	4 杭	5.1	44.1	6.4		芯持丸木	キリ	H3-w7	2310
156	1 漆台付容器	6.7	4.7	1.1	7.5	横木取り	サクラ属(広義)	I2-w11	2327
	2 漆容器	3.5	3.3	0.8		横木取り	イヌガヤ	I2	2381
157	1 漆浅鉢	22.9	6.6	1.1		横木取り	イヌガヤ	I3-w19	2274

図 番	器種	横cm	縦cm	厚さcm	底径cm	木取り	樹種	取上番号	分析番号
2	床容器	9.2	6.5	1.0		横木取り	イヌガヤ	13-w21	2536
3	床台付容器	20.2	9.9	1.0	9.1	横木取り	イヌガヤ	13-w22	2528
158	4 棒状製品	2.4	12.0	2.4				13-w35	
5	櫓	7.2	17.0	2.5				13-w35	
6	櫓柄	4.0	29.0	2.0				13-w34	
7	櫓	9.2	74.4	2.8				13-w34	
8	櫓木製品	12.0	105.0	4.8		みかん割	コナラ属クスギ節	13-w25	2311
160	1 床鉢	19.4	13.6	1.1		横木取り	サクラ属 (広義)	J2-w36	2546
2	床容器	6.3	2.8	0.7		横木取り	サクラ属 (広義)	J2	2586
3	床器	21.5	2.8	0.9		横木取り	サクラ属 (広義)	J2-w25	2535
4	床浅鉢	7.8	4.0	1.0		横木取り	サクラ属 (広義)	J2-33	2588
161	1 床浅鉢	9.8	5.7	0.8		横木取り	サクラ属 (広義)	J3	2269
2	床浅鉢		5.3	1.0		不明	サクラ属 (広義)	J3-w26	2278
3	床浅鉢	8.8	4.6	1.2		不明	サクラ属 (広義)	J3-w49	2265
4	床浅鉢	6.0	4.1	0.8		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w22	2589
5	床浅鉢	23.0	6.8	1.0		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w44	2270
162	6 床浅鉢	13.0	2.0	0.9		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w48・J2	2525
7	床浅鉢	6.6	2.6	0.6		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w28・w31	2541
8	床浅鉢	5.8	4.6	1.7		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w29	2561
9	床浅鉢	4.8	3.2	0.7		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w25	2563
10	床浅鉢	3.6	3.2	0.8		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w51	2564
11	床浅鉢	9.7	5.4	0.9		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w55	2554
12	床容器	20.6	7.2	0.7		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w21.20	2540
13	床浅鉢	6.6	3.6	1.2		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w27	2565
163	14 床容器	4.8	4.0	1.2		横木取り	サクラ属 (広義)	J3	2635
15	床容器	4.3	3.4	1.1		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w50	2553
16	床容器	1.3	2.2	1.2				J3-w56	
17	床杓子	9.4	3.7	0.8		横木取り	イヌガヤ	J3-w10	2533
18	床器	9.6	4.3	1.4		横木取り	サクラ属 (広義)	J3-w17	2548
19	床器	23.8	7.4	1.4				J3-w56	
20	板状製品	6.4	29.6	2.0		縦目	コナラ属クスギ節	J3-w57	2322
21	杭	9.0	16.5	3.9		板目	クリ	J3-w64	2334
165	1 床容器	3.2	3.0	0.6		横木取り	サクラ属 (広義)	A2-w10	2569
2	床容器	4.2	3.2	1.2		横木取り	サクラ属 (広義)	A2	2571
3	へら状製品	3.0	11.6	2.8		芯なし削り出し	コナラ属クスギ節	A2-w6	2314
167	1 床脚付容器	10.8	7.5	1.8		横木取り	トチノキ	B1-w53	2566
2	床脚付容器	8.6	13.6	4.3		横木取り	サクラ属 (広義)	B1-w1	2262
168	3 床浅鉢	14.1	7.3	1.0		横木取り	サクラ属 (広義)	B1-w13	2537
4	床浅鉢	5.9	4.8	1.0		横木取り	サクラ属 (広義)	B1	2594
5	床鉢	3.2	2.4	1.0		横木取り	サクラ属 (広義)	B1-w14	2526
6	欠柄状製品	0.8	43.6	0.8		芯持丸木	イヌガヤ	B2-w58	2327
169	1 床浅鉢	17.4	4.8	0.8		横木取り	サクラ属 (広義)	B2-w18	2271
2	床鉢	2.0	2.2	0.8		横木取り	サクラ属 (広義)	B2-w17	2543
3	床鉢	2.8	1.6	1.0		横木取り	サクラ属 (広義)	B2-w19	2545
4	床脚付容器	5.8	3.4	4.5		横木取り	トチノキ	B2	2534
5	床脚付容器	3.4	2.2	3.4		横木取り	サクラ属 (広義)	B2-w7	2558
6	床浅鉢	6.4	8.6	1.2		横木取り	サクラ属 (広義)	B2-w24	2633
7	床浅鉢	5.5	2.6	0.8		不明		B2-w25	2639
170	8 杭	5.6	131.2	6.0		芯持丸木	イヌガヤ	B2-w6	2340
172	1 床浅鉢	11.2	8.8	1.2		横木取り	サクラ属 (広義)	C1-w25	2549・2550
2	床浅鉢	6.6	5.4	1.3		横木取り	サクラ属 (広義)	C1-w27	2591
3	床浅鉢	3.8	3.0	0.8		不明	サクラ属 (広義)	C1-w69	2631
4	床浅鉢	1.7	4.4	1.2		不明	サクラ属 (広義)	C1-w58	2632
5	床浅鉢	1.9	4.0	0.9		横木取り	サクラ属 (広義)	C1-w66	2596

国番	器種	横cm	縦cm	厚さcm	底径cm	木取り	樹種	取上番号	分析番号
6	漆浅鉢	16.6	4.6	1.0		横木取り	サクラ属(広義)	C1-w65	2266
7	漆浅鉢	6.4	5.8	0.7		横木取り	イヌガヤ	C1	2276
173	漆臼子	15.3	4.8	1.0		横木取り	イヌガヤ	C1-w2・w3	2562
9	漆容器	13.0	7.9	1.1		横木取り	トチノキ	C1-w20・D1	2555
174	漆容器	7.9	4.2	1.1				C1-w57	
11	漆容器	2.6	5.4	0.8		不明	サクラ属(広義)	C1-22	2634
12	漆容器	5.3	2.4	0.8		横木取り	サクラ属(広義)	C1	2585
13	漆容器	3.0	1.6	0.8		横木取り	トチノキ	C1-w22	2636
14	漆容器	3.5	2.2	1.5		不明	サクラ属(広義)	C1-w52	2611
15	漆浅鉢	2.9	5.8	1.2		不明	サクラ属(広義)	C1	2638
16	漆浅鉢	5.3	1.9	0.6		横木取り	サクラ属(広義)	C1	2584
17	台付容器	32.4	15.6	8.8		芯持丸木	トチノキ	C1-w80	2299
18	漆容器	2.4	1.6	1.0		横木取り	サクラ属(広義)	C1-w23	2637
19	漆浅鉢	7.8	1.8	1.0		横木取り	イヌガヤ	C1-w73	2559
175	浅鉢	18.0	5.0	2.8	片口	横木取り	イヌガヤ	C1-w78	2298
21	石斧柄	19.6	33.2	6.4		芯持丸木	コナラ属クスギ節	C1-w17	2280
22	石斧柄	20.8	28.2	6.8		芯持丸木	コナラ属クスギ節	C-w59	2279
23	石斧柄	23.2	24.0	4.8		芯持丸木	コナラ属クスギ節	C1-w76	2286
24	石斧柄	23.0	16.0	4.6				C1-w 仮1	
25	石斧柄	12.0	13.2	4.6		芯持丸木	コナラ属クスギ節	C1-w 仮1	2282
177	26 榎	6.4	8.8	1.4		追い榎目	コナラ属クスギ節	C1	2304
27	石斧柄	15.8	5.2	2.8		芯持丸木	クリ	C1	2281
		3.2	25.4	3.2				C1-w 仮1	
29	棒状製品	2.4	7.0	2.4		芯持丸木	イヌエンジュ	C1-w50	2313
30	板材	5.6	13.6	1.0		榎目	コナラ属クスギ節	C1-w28	2308
31	丸木材	13.6	113.6	13.6		芯持丸木	イヌガヤ	C1-w32	2342
32	丸木材	2.0	128.0	2.0		芯持丸木	イヌガヤ	C1-w40	2337
33	丸木材	14.0	214.0	12.0		不明	不明	C1	2626
178	1 把手付容器	12.8	6.0	1.0		横木取り	イヌガヤ	C2-w1	2547
2	漆浅鉢	4.6	6.2	0.8		不明	サクラ属(広義)	C2	2629
3	漆浅鉢	6.7	6.0	0.6		横木取り	イヌガヤ	C2	2272
4	板材	13.2	29.6			板目	クリ	C2-w2	2309
182	1 漆浅鉢	13.0	7.6	1.2		横木取り	サクラ属(広義)	D10-w3	2273
2	漆浅鉢	2.2	2.6	0.6		横木取り	イヌガヤ	D1-w2	2587
3	漆鉢	9.1	10.9	1.2		横木取り	サクラ属(広義)	D10-w1・D1	2597
183	1 漆浅鉢	16.8	5.5	0.7		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w180	2264
2	漆浅鉢	8.7	3.0	0.3		横木取り	イヌガヤ	D1-w295	2263
3	漆浅鉢	6.2	6.3	1.2		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w1	2275
4	漆浅鉢	15.3	3.5	0.5		横木取り	イヌガヤ	D1-w219	2267
5	漆浅鉢	14.3	6.8	1.4		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w10	2531
184	6 漆浅鉢	11.4	8.2	1.8				D1-w286-2	
7	漆浅鉢	8.1	5.0	1.3		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w11	2277
8	漆浅鉢	5.8	3.2	0.6		横木取り	ニシキギ属	D1-w178	2529
9	漆浅鉢	4.8	2.6	0.4		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w179	2530
10	漆浅鉢	6.4	2.2	0.8		不明	サクラ属(広義)	D1-w252	2630
11	漆浅鉢	4.4	1.2	0.5				D1-w17	
12	漆浅鉢	4.0	3.7	0.4				D1-w275	
13	漆浅鉢	2.6	3.8	0.7		横木取り	イヌガヤ	D1-w237	2590
14	漆浅鉢	4.0	8.2	1.7		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w230	2592
15	漆浅鉢	2.6	1.7	1.3		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w222	2595
16	漆浅鉢	3.0	1.0	0.6		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w184	2570
17	漆浅鉢	3.5	2.6	0.6		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w173	2578
18	漆浅鉢	4.8	5.5	0.8		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w5	2577
19	漆浅鉢	4.3	6.4	0.9		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w272	2602

図 番	器種	横cm	縦cm	厚さcm	底径cm	木取り	樹種	取上番号	分析番号
185	20 床杓子?	4.8	6.4	1.4		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w276	2605
21	床浅鉢	4.2	3.4	1.2		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w282	2544
22	床浅鉢	4.8	5.4	1.3				D1-w275	
23	床浅鉢	3.3	4.4	0.9		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w269	2399
24	床容器	7.6	6.0	1.5			サクラ属(広義)	D1	
25	床容器	6.4	3.5	1.0		横木取り	サクラ属(広義)	D1	2572
26	床容器	1.8	4.6	1.8		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w225	2579
27	床容器	1.5	1.6	1.0		横木取り	イヌガヤ	D1-w16	2575
28	床容器	2.2	3.3	0.7		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w273	2603
29	床容器	3.8	3.2	0.7		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w271	2601
30	床容器	2.2	1.8	0.8		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w7	2593
31	床容器	2.6	3.0	0.7		横木取り	サクラ属(広義)	D1	2580
32	床容器	4.4	1.6	0.5		横木取り	不明	D1-w12	2576
33	床容器	6.2	4.0	1.4		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w193	2573
34	床容器	3.4	3.0	1.2				D1-w286-2	
35	床容器	2.0	3.9	1.0		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w270	2604
36	床容器	1.8	2.5	0.8		不明	ニシキギ属	D1-w277	2606
37	笠身具	1.2	3.3	0.4		板目	トチノキ	D1-w280	2539
38	床脚付容器	2.2	2.2	2.4		不明	ニシキギ属	D1-w15	2556
39	棒状製品	1.2	7.0	1.2		割材	クリ	D1-w14	2315
186	40 床付容器	23.8	6.4	1.2	8.6	横木取り	サクラ属(広義)	D1-w220	2567
41	浅鉢	20.8	2.7	1.2		横木取り	クリ	D1-w247	2290
42	床杓子	7.9	2.0	0.6		横木取り	イヌガヤ	D1-w297	2538
43	床浅鉢	5.7	3.0	1.4		横木取り	サクラ属(広義)	D1-w207	2583
187	44 台付舟形容器	21.0	7.3	2.4		木の瘤	サクラ属(広義)	D1-w163	2291
188	45 石斧柄	24.4	38.4	6.8		芯持丸木	コナラ属クスギ節	D1-w196	2284
46	石斧柄	14.4	27.0	6.8		芯持丸木	コナラ属クスギ節	D1-w89	2285
48	板状製品	5.6	14.8	2.2		割材切り出し	コナラ属クスギ節	D1-w224	2323
47	石斧柄	26.0	27.6	6.0		芯持丸木	コナラ属クスギ節	D1-w66	2289
189	49 石斧柄	40.0	89.2	7.6		芯持丸木	コナラ属クスギ節	D1-w177	2283
50	板材	23.4	94.8	3.6		桧目	クリ	D1-w135	2325
51	椀	14.0	111.3	3.0		桧目	コナラ属クスギ節	D1-w268	2305
189	52 杭	8.0	172.0	7.0		芯持丸木	イヌガヤ	D1-w221	2341
191	1 漆器	13.0	5.9	1.0		不明	サクラ属(広義)	E10-w3	2268
192	1 漆器	2.2	1.8	1.0		横木取り	サクラ属(広義)	E1-w12	2557
2	杓子	15.0	5.8	0.8		横木取り	イヌガヤ	E1-w1	2551
3	漆器	10.8	5.3	0.6		横木取り	サクラ属(広義)	E1-w3	2532
193	4 杭	4.8	18.6	3.6		みかん割	コナラ属クスギ節	E1-w6	2320
5	椀未製品	9.4	122.1	4.8		板目	クリ	E1-w23	2306
6	杭	6.6	123.0	1.8		みかん割	コナラ属クスギ節	E1-w1 ~ 7	2336
7	丸木材	15.0	171.0	18.0		不明	クリ	E1-w13	2616・2625・2615
194	1 床浅鉢	3.8	8.2	1.2		横木取り	サクラ属(広義)	1 区確認面	2598
2	床浅鉢	15.2	5.7	1.4				ゴルフ場試掘	
3	漆鉢	7.2	2.8	0.7		横木取り	サクラ属(広義)	2 区確認面	2560
4	床容器	4.6	2.4	0.7				ゴルフ場試掘	
5	漆鉢	7.1	9.2	1.8		横木取り	トチノキ	表探	2542
6	床浅鉢	9.1	4.3	0.9		横木取り	サクラ属(広義)	表探	2600
7	舟形容器	15.5	6.6	0.7		横木取り	イヌガヤ	2 区確認面	2292
195	8 床浅鉢	6.0	9.6	0.9		横木取り	サクラ属(広義)	砂層内	2609
9	床容器	3.0	1.6	0.7				調査区北側表探	
10	床容器	3.6	2.3	1.0				調査区北側表探	

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おおきだいせき							
書 名	大木戸遺跡Ⅲ							
副 書 名	大宮西部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第 444 集							
編 著 者 名	金子直行 大谷徹 矢部謙							
編 集 機 関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所 在 地	〒 369-0108 埼玉県熊谷市船木台 4 丁目 4 番地 1 TEL. 0493-39-3955							
発行年月日	西暦 2018 (平成 30) 年 3 月 22 日							
所 収 遺 跡	所在地	コード		北緯 ° N	東経 ° E	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大木戸遺跡 (第18・20次)	さいたま市 西区大字 指扇 4044 他	11100	425	35° 55' 31"	139° 34' 31"	20150101 ~ 20150331 20150401 ~ 20151203	2,557	区画整理
所 収 遺 跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大木戸遺跡 (第18・20次)	集落跡	縄文時代	土壌 木組状遺構 杭跡 祭祀跡 自然木集中区 3 箇所	1 基 1 基 6 基 1 基	縄文土器・土製品・ 石器・石製品・木製 品・編組製品		縄文時代後期堀之内 2 式から加 曾利 B 2 式期までにほぼ限定さ れた土器群や各種の木器・木製 品類、特に赤漆塗り漆器が多数 出土している。その中で、藍占 漆器は現存する物の中では最古 になる可能性がある。	
要 約								
大木戸遺跡第 18・20 次調査区は、台地上の縄文時代後期前葉から中葉にかけての集落下に広がる滝沼川によって形成された低湿地遺跡であり、調査区からは同時期の多量な土器群及び木製品類が出土した。時期がほぼ堀之内 2 式から加曾利 B 2 式までに限定された木製品は、器種も多様であり、中でも漆器類は注目し値するものがある。木製品は赤漆塗りの耳椀、櫛、腕輪状木製品などの装身具と、細い糸紐で装飾された飾弓や丸弓、石斧の柄や木製品、丸木舟、櫂などの道具類、赤漆が塗られた漆器類、藍占漆器、杓子や舟形容器などの容器類が多数出土している。中でも飾弓の精緻な装飾文様や文様が彫刻された大形の脚が付く脚付漆器類は初見であり、当時の工芸技術の高さを物語っている。各種の自然科学分析を行った結果、台地上に集落があったところは低地部に砂礫の堆積するような流水があったようであるが、やがて流下物の堆積と共に滞水が始まり、浅い湖沼地と化して藻などが繁茂する環境へと変化する、集落は終焉を迎える。住環境の変化とともに、他の地へ移動していったものと推測される。								

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第444集

大 木 戸 遺 跡 Ⅲ

大宮西部特定土地地区画整理事業地内

埋蔵文化財発掘調査報告

(第1分冊)

平成30年3月10日 印刷

平成30年3月22日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

0493 (39) 3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／山進社印刷株式会社